

巨摩・若江北

(その3)

発掘調査概要

都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設に伴う
巨摩・若江北遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1993. 3. 31.

(財)大阪文化財センター

はじめに

当センターが近畿自動車道天理～吹田線の文化財調査に着手したのは1976年の長原遺跡からであった。それから十年にわたり河内平野に延々と発掘調査の鍬を入れ続け1986年の亀井北遺跡をもって発掘調査を完全終了した。しかしながら、近畿自動車道天理～吹田線の遺物整理事業は現在も長田分室において継続して行っているが、フィールドとしての「河内平野」に発掘調査を実施することは当センターにとって6年ぶりのこととなった。

今回、「都市計画道路大阪中央環状線 仮設迂回路建設に伴う文化財調査」は小範囲の調査であったため試掘トレンチの色彩が強くなったが、以前に当センターが二次にわたり実施した発掘調査結果を追証することとなった。

将来に計画されている中央環状線巨摩橋西交差点高架工事に伴い埋蔵文化財発掘調査が問題となることであろう。この工事区間には瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡などが存在し、重要な知見が見いだされることは公然たる事実であろう。本工事に伴う埋蔵文化財の調査方法等の協議は前記の遺跡が考古学史上貴重なものであることを踏まえ十分な検討をしていただきたいものである。本調査はそれに微力であるが寄与できたものと自負している。

調査にあたり、大阪府教育委員会、大阪府土木部交通政策課、大阪府八尾土木事務所をはじめとする関係各位の御指導、御協力をいただいたことを感謝している。今後とも当センターへの御支援を賜るようお願いしたい。

(財)大阪文化財センター 理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設に伴う大阪府東大阪市若江西新町二・三丁目、若江北町二・三丁目に所在する巨摩廃寺遺跡と、および若江西新町三・四丁目、若江北町三丁目、若江南町三丁目に所在する若江北遺跡の埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。
2. 今回の調査地区は巨摩廃寺遺跡側は東大阪市若江西新町二丁目、若江北遺跡側が若江西新町三丁目に位置する。
3. 巨摩廃寺遺跡の第1次調査は1978年11月1日～1980年12月28日まで、巨摩廃寺遺跡(その2)は1982年7月5日～1983年4月30日に実施された。
若江北遺跡の第1次調査は1979年6月1日～1982年2月28日まで、若江北遺跡(その2)は1982年7月5日～1983年4月30日に実施された。
今回の調査は小規模であるが両遺跡とも第3次の調査となるため、巨摩廃寺遺跡(その3)および若江北遺跡(その3)と呼称している。
4. 本調査は、大阪府八尾土木事務所より、(財)大阪文化財センターが委託を受けた。
5. 本調査は(財)大阪文化財センターが実施し、当初調査課のもと調査課長中西靖人の指導を受け調査課村上年生が、平成4年4月以降、調査第1係長石神幸子の指導を受け調査第1係村上年生・若林邦彦が担当し、調査補助員西田登姿子が補助した。
また写真については調査第1係片山彰一が担当し、調査員笠井 勉が補助した。
6. 現地調査は若江北遺跡側については1992(平成4年)3月2日から5月2日まで行い、巨摩遺跡側については1992(平成4年)7月29日から9月30日まで行った。
7. 本書の作成には村上・若林があたり、執筆分担は目次に示した。

凡 例

1. 本書中のレベルはすべてT. P. (東京湾平均海面)を用い、方位は座標北である。
なお、座標北を軸として、真北は東へ0度13分、磁北は西へ6度30分である。
2. 実測図の縮尺は、遺構については1/200、1/300を、遺物は土器1/4を基本とした。
3. 土器の断面は白抜きで表現し、あきらかに生駒西麓産と思われるものにはスクリーン・トーンを貼付した。
4. 遺物写真の縮尺は不同である。
5. 土色は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』5版1976.9.に準じる。

巨摩・若江北(その3)発掘調査概要

都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設に伴う
巨摩・若江北遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書

一 目 次

序文

例言

I. 調査に至る経過と方法(村上).....	1
II. 基本層序と遺構面		
1. 巨摩遺跡(村上).....	4
2. 若江北遺跡(若林).....	7
III. 各時代の遺構と遺物(巨摩遺跡)(村上).....	12
1. 弥生時代中期	12
2. 弥生時代中期～後期	12
3. 古墳時代前期	13
4. 歴史時代	14
IV. 各時代の遺構と遺物(若江北遺跡)		
1. 弥生時代前期～中期前半(若林).....	17
2. 弥生時代中期後半～後期初頭(若林).....	18
3. 古墳時代前期(村上).....	38
4. 古墳時代中期以降(村上).....	42
V. 結語－巨摩遺跡・若江北遺跡の対応関係－(若林).....	44

I. 調査に到る経過と方法

〔遺跡の状況〕

今回、「都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設」が実施される場所は、第二寝屋川の北側が巨摩廃寺遺跡に位置し、南側が若江北遺跡に位置する。

(巨摩廃寺遺跡)

巨摩廃寺遺跡は東大阪市若江西新町2・3丁目に所在する。

巨摩廃寺遺跡は近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い当センターが二次にわたり調査を実施した。巨摩廃寺遺跡の第1次調査は1978年11月1日～1980年12月28日まで、巨摩廃寺遺跡(その2)は1982年7月5日～1983年4月30日に実施した。

巨摩廃寺遺跡は弥生時代中期～後期にかけての方形周溝墓(墳丘墓)や、古墳後期の方墳ならびに中世の掘立柱建物等、多数の遺構を発見。方形周溝墓(墳丘墓)は畿内における弥生時代で始めて副葬品が確認されたものである。

『大阪府文化財地名表』大阪府教委1990では「巨摩廃寺遺跡」とあり正式名称であるが、以下では「巨摩遺跡」と呼称する。

(若江北遺跡)

若江北遺跡は東大阪市若江西新町3・4丁目に所在する。

若江北遺跡は近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い、当センターが二次にわたり調査を実施した。若江北遺跡の第1次調査は1979年6月1日～1982年2月28日まで、若江北遺跡(その2)は1982年7月5日～1983年4月30日に実施した。

若江北遺跡は弥生時代前期の水田や、中期の焼失家屋・竪穴住居、さらに古墳時代初頭・前期の良好な水田を検出した。古墳時代(布留式土器並行期)の水田畦畔から土器群が検出したことは特記すべきであろう。

〔調査に到る経過〕

「都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設」は将来実施されるであろう中央環状線の山賀～巨摩交差点間の高架工事に起因している。迂回路は山賀から近畿自動車道の橋脚をくぐり中央環状線の南行き車線と並行して設置され巨摩橋交差点を通過しさらに北に走り第二寝屋川を仮橋にて渡りやがて近畿自動車道の橋脚をくぐり巨摩交差点の手前で北行き本線と合流するものである。本調査は第二寝屋川に架橋される橋のための橋台部を調査したものである。

大阪府教育委員会文化財保護課・大阪府八尾土木事務所は調査方法等の協議を行い、中央環状線北行き車線迂回に伴う仮設工と並行し文化財調査を実施する方針を決定した。その後(平成3年10月末)、上記二者と大阪府都市政策課とセンターを含め基本的な協議を終了し、八尾土木事務所と当センターは平成3年12月1日より平成4年3月31日を委託期間とし12月2日付けで契約を締結した。その後、工期延長が生じたので変更工期を平成3年12月1日から平成4年9月30日

までとする変更契約を5月25日付けで締結した。

(若江北遺跡)

八尾土木事務所側は仮設迂回路工事の発注を平成3年秋に二業者にされたが、しかしながら諸条件の中で工事は進捗しなかった。平成4年に歳は移り2月ようやく若江北側の業者が工事着手を行い、2月21日に矢板の打設が開始された。矢板打ちは堤防などのため盛土がなされていたため、盛土を0.5~0.6m除去後、矢板打ちを開始して2月28日に終了した。

現地調査は3月2日から調査を開始し、5月2日に全調査を終了した。

(巨摩遺跡)

特に巨摩遺跡側は大阪府寝屋川水系改修工営所による河川改修工事を開始されており、現地は平成4年3月に八尾土木事務所側に引き渡される予定であったが予定が延期していた。

そのため、7月に巨摩側の業者が工事着手を行い、7月15日に八尾土木事務所において調査の打合せを行い、7月22日に河川改修工事による工所用盛土2mを除去し農業用水管の位置を確認するため試掘を実施した。計画のトレンチ位置は農業用水管に全く影響を与えない事が確認されたことから、ようやく7月23日に矢板の打設が開始され7月28日に終了した。

現地調査は7月29日に開始し、9月30日に全調査を終了した。

〔調査の方法〕

トレンチの名称は設計図面によると巨摩側がA1、若江北側がA2であったが、当センターが従来から使用している地区単位のトレンチ名称を踏襲して連続番号による呼称をおこなった。

KOM1	I	1 I	2 I					
KOM1	J	1 J	2 J	3 J	4 J			
KOM2	2	5J(2-1)	6J(2-2)	7J(2-3)	8J(2-4)	9J(2-5)	10J(2-6)	
KOM3	3	1 1 J (A1)						
WKK1	A	1 A	2 A	3 A	4 A	5 A	6 A	7 A
WKK1	B	1 B	2 B	3 B	4 B			
WKK1	C	1 C	2 C	3 C	4 C	5 C	6 C	7 C
WKK1	D	1 D	2 D	3 D	4 D			
WKK2	北	8 A(N1)	9 A(N2)					
WKK2	南	8 C(S1)	9 C(S2)	10C(S3)				
WKK3	3	1 0 A (A2)						

表1 トレンチ名称対照表

ゆえに、巨摩側のA1を11Jトレンチと、若江北側のA2は10Aトレンチとなる。

11Jトレンチは長さ24.5m、幅2.0m、面積49.0㎡であり、10Aトレンチは長さ24.7m、幅4.7m、面積113.4㎡である。両トレンチとも機械掘削0.9m人力掘削3.8mで設計されていた。

〔遺構実測〕

当初から実測要員が確保できないため遺構実測については空中測量を多用する方針であった。若江北側は7面において空中測量を実施できたが、一部においては縮尺1/40で実測を行った。巨摩側については2面において実施できた。

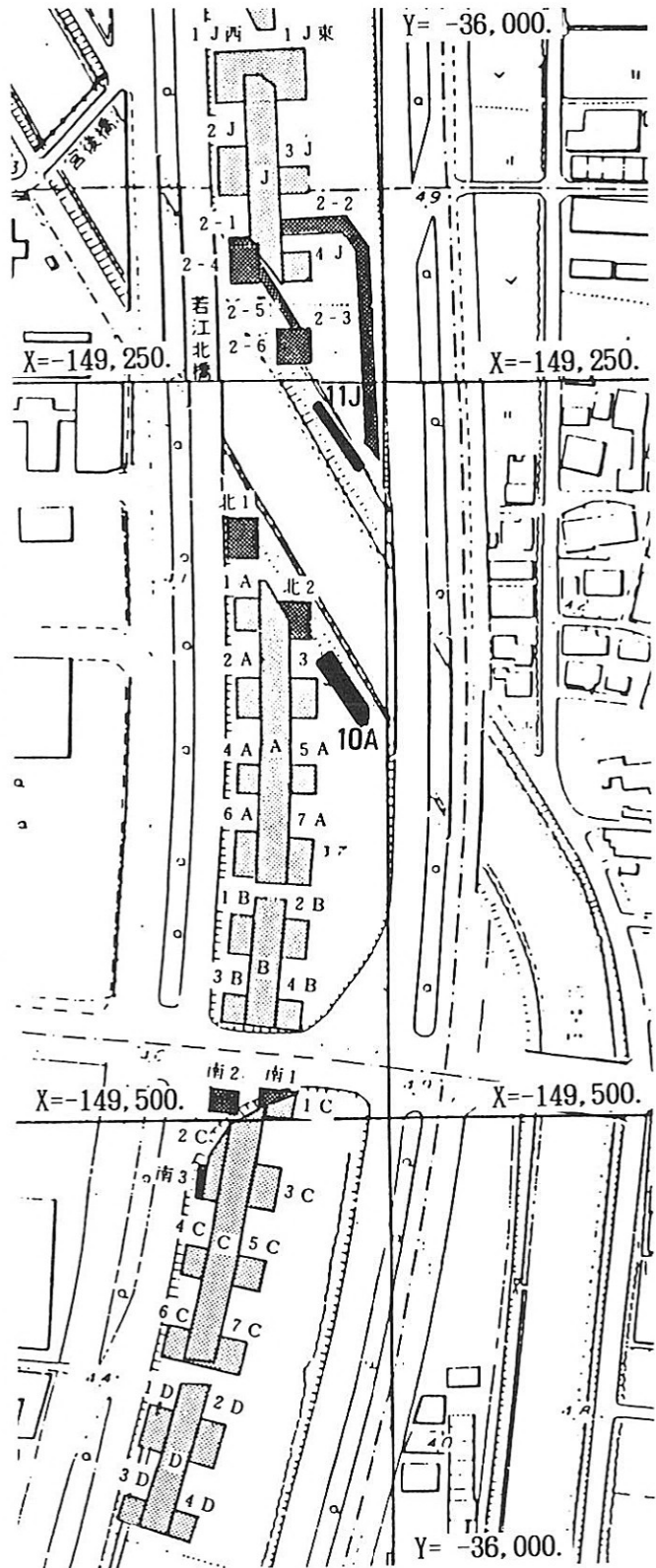
〔測量基準線〕

基準線は国土座標系を用い、座標は第IV系である。実測図中においてX軸・Y軸を明示した。調査トレンチが小範囲であるため小区画は設けていない。方位についても座標北である。

〔水準〕

高さは、T.P.(Tokyo peil 東京湾平均海面)を用いている、この値はO.P.(大阪湾平均海面)+1.3mである。以前の概要報告書がO.P.(大阪湾平均海面)を使用しているため

図1 トレンチ位置図



比較検討が煩瑣になるが、将来のことを考えあわせてT.P.(東京湾平均海面)をあえて使用した。

II. 基本層序と遺構面

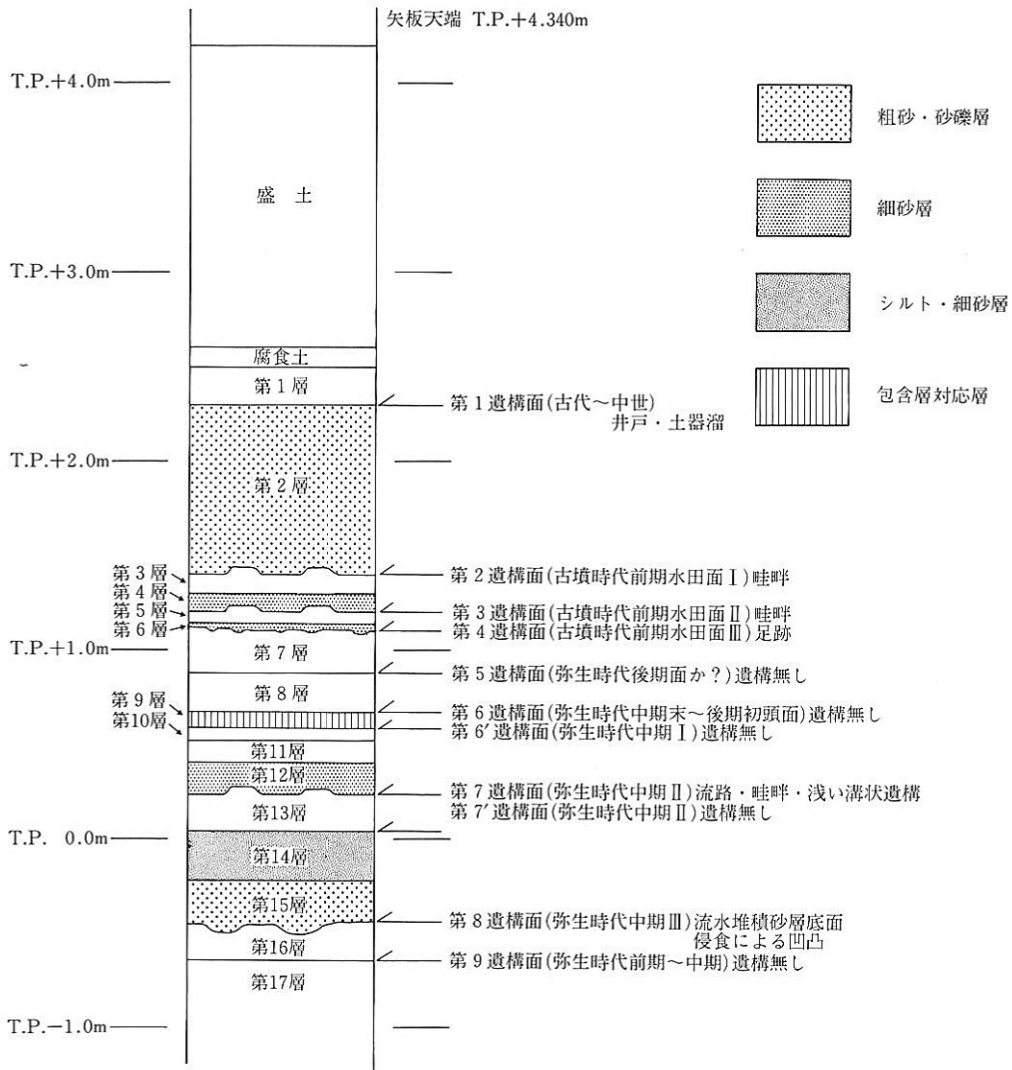


図2 基本層序・遺構面

[層名]

第1層暗褐色粗砂混粘土層	層厚	20 cm	第10~12層 上部流水堆積層	40 cm
第2層流水堆積砂層	"	80 cm	第10層淡青灰色微砂層	
第3層青灰色シルト層(粘性有り)		12 cm	第11層淡青灰色粘土混シルト層	
第4層灰黄色細砂層		10 cm	第12層淡青灰色細砂層	
第5層青灰色シルト層(粘性有り)		16 cm	第13層暗青灰色微砂混粘土層	16~20 cm
第6層灰褐色粗砂層		6~10 cm	第14~15層 下部流水堆積層	30~40 cm
第7層青灰色粘土層		20 cm	第14層青灰色シルト・淡青灰色細砂層互層	
第8層暗青灰色粘土層(植物遺体含む)		20 cm	第15層淡青灰色細砂層	
第9層灰黒色粘土層(包含層に対応)		10 cm	第16層暗青灰色粘土層	20 cm
			第17層暗青灰色粘土層(植物痕多し)	10 cm 以上

1. 巨摩遺跡の基本層序と遺構面

〔基本層序と遺構面〕

層序については巨摩遺跡の第1次・第2次調査の認識と大きな違いはない。

第2層の流水堆積砂層上面において中世の井戸が検出されている、この層は第1次調査では瓜生堂遺跡との関連から古墳時代前期の包含層とされているが、第2次調査の流水砂層古墳時代後期～中世の包含層という認識のほうが正しいものといえる。

古墳時代の水田面は3面検出されたが、第2遺構面とした水田面Ⅰは第2層流水堆積層の下部に形成される第3層青灰色シルト層を利用して水田面を作っており、あまり安定した層ではないために、トレンチ中央で途切れていた。

第5層青灰色シルト層をベースとする水田面Ⅱはトレンチ全体で検出されたが畦畔を一部にしか検出出来なかった。

第7層青灰色粘土層をベースとする水田面Ⅲは畦畔遺構が検出できなかったが、足跡が認められたことから水田面と推定した。上位2面の水田面は砂層によってパックされているため明確であり、水田面Ⅲは以前の調査では粘質の微砂によって覆われていることが記載されているが、今回の調査では全域にわたってではないが第6層灰褐色粗砂層が確認され、3面とも砂層によって水田面をパックすることが判明した。

弥生時代後期とされる面は、第1次調査で2～3面検出されているが、「V(Ⅰ)面を形成するのは粘土層で、V(Ⅱ)面を形成するのは粘土層及び微砂層であるが、いずれもこまかい炭化物(植物遺体もしくは小枝であろう)がはいって面を成している。」としている。第2次調査においても2～3層の粘土層とされ、「しかし、厚い粘土の堆積と植物遺体を含む層がみられる状況で平面的には把握が困難である。溝と堤は第1次調査で後期Ⅲ遺構面とされる面で確認した。これは第2地区と第5地区で検出され、弥生時代中期のものと重複している」としている。弥生時代後期と対応する層は第8層暗青灰色粘土層(植物遺体含む)であった。この層の上面と下面が後期遺構面と考えられるが、今回は遺構は検出できなかった。

弥生時代中期遺構面は第2次調査において「弥生中期遺構面Ⅱは集落面上に堆積する灰黒色粘質砂土層上面をベース面とする。この面に遺構が存在することは、今回の調査で確認された。」としている。第1次調査では「青灰色微砂層(粘質、場所により乳黄色微砂を含む)をベース面としている。青灰色微砂層はG地区からJ地区にかけて徐々に厚くなり、遺構面のレベルも北から南に徐々に高くなっていく。」とされるが、今回の調査における第10層の淡青灰色微砂層に対応すると考えられ、本層は流水堆積の最上部に堆積する砂層である。

この弥生時代中期面の上を覆うのが第9層灰黒色粘土層で弥生式土器の包含層である。この層は、第1次調査で灰黒色粘土・灰黒色砂混じり粘土と呼称される。第2次調査では灰黒色の粘質砂土層の呼ばれ、どちらも弥生中期包含層としている層であり、灰黒色系のキー層となる層である。同層は若江北遺跡でも確認されており、今回の若江北遺跡の調査において弥生時代中期末～

後期初めの包含層とした層である。

弥生時代中期の流水堆積層の中位には第13層の暗青灰色微砂混粘土層が確認され畦畔と流路が検出された。この層は最大20cmの厚さの層で流水堆積砂層中に形成された粘土層を利用した短期間の水田面と考えられる。

第16層暗灰色粘土層は弥生中期に属すると思われる粘土層で流水堆積砂層の底面となり、よほど強い流れが想定され侵食による凹凸が大変激しかった。

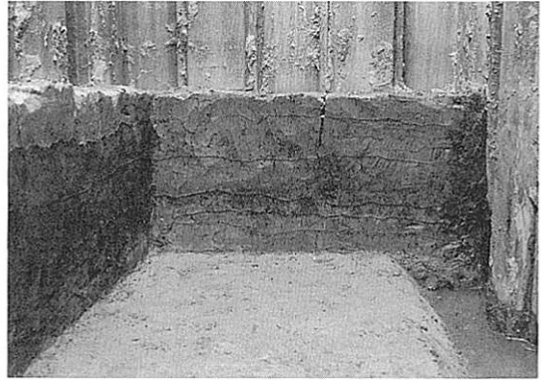


写真1 北西壁

第17層暗青灰色粘土層(植物痕多し)上面まで検出したが遺構は確認出来なかった、この面は弥生時代前期～中期に属する面と考えられる。

今回は盛土が厚くあった為に、弥生時代前期の対応層(暗灰色粘土層)や包含層までは安全上の問題があり調査を行えなかった。

2. 若江北遺跡

若江北遺跡の土層堆積は、新家・西岩田・瓜生堂・巨摩遺跡といった当遺跡の北方にある近辺の諸遺跡と同様に、河内瀉に流れ込む河川の沖積作用により形成され複雑な状況を呈している。基本的には粗砂や細砂を基調とした流水堆積層と比較的緩やかな沖積作用によって形成されたと考えられる粘土・粘質土層が交互に堆積する状況と言えよう。その概要については、既刊の『若江北』¹⁾『巨摩・若江北(その2)』²⁾の中で述べられている。今回の調査区域は、既応の調査地に隣接した東側に位置していることからその基本層序に大きな変化はなく、遺構面に関してもほぼ対応したものとなっている。但し若干の差異もみられることから、今回検出を行った遺構面の中心から既応の調査と対応する遺構面の形成状況を中心に再度説明を記したい。(以下図3・4参照)

・第I遺構面(弥生時代前期)

2～4 cmと薄く堆積する緑灰色粘土層(13層)の上面である。13層の下位には黒色粘土層(14層)が見られたが、これは既応の調査で山賀遺跡縄文晩期包含層に対応するとされている鍵層である。しかし、図3に見るように当調査区域では僅か3～5 cmと極めて薄い堆積として検出され、調査

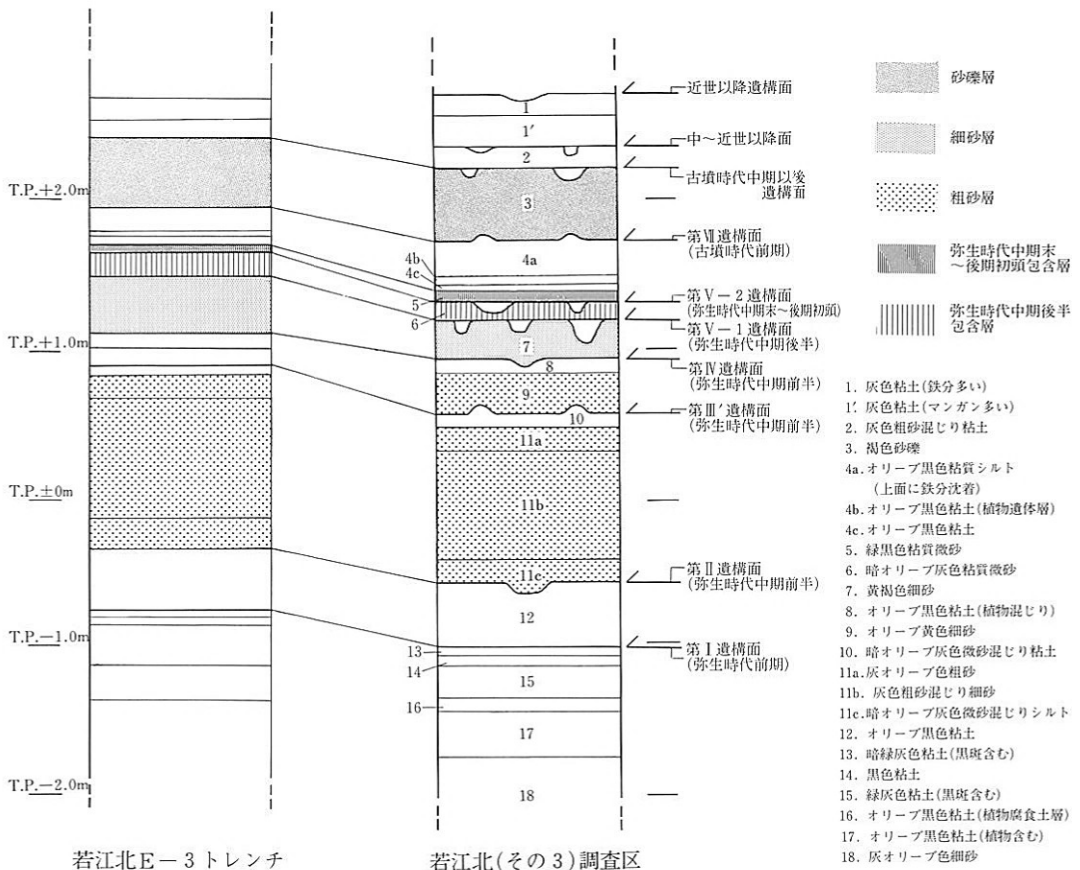


図3 基本層序

区域の北東部では一部とぎれている状況さえみられた。また、当遺構面の標高はT. P. -1.0 m前後と隣接する第1次調査a-3トレンチに比べ約20cmも低くなっており、ここにも既応の調査とは異なる状況が看取できる。

既応の調査では、当遺構面は弥生時代前期に比定され、自然河川や溝状の遺構が確認されているが今回の調査では遺構・遺物を確認することはできなかった。

・第II遺構面(弥生時代中期前半)

第I遺構面の上位に、20~30cmの厚さで堆積するオリブ黒色粘土(12層)の上面である。標高はT. P. -0.6m前後を測り、第I遺構面同様にa-3トレンチからは約20cm程度低くなっている。直上の暗オリブ灰色微砂混じり粘質シルト層(11c層)との分層は極めて困難な状態であった。既応の調査では水田面と考えられているが、今回の調査では自然流路の一部と考えられる溝状の落ち込みと土坑状の遺構を検出したのみであった。

11c層から当遺構面に向けて少数ではあるがカニ穴が検出され(図4)、当該期には本調査区域は浸水を受ける状況であった可能性が考えられる。

・第III'遺構面(弥生時代中期前半)

上述の11c層の上面は既応の調査の第III遺構面に対応すると考えられるが、大きく波打つ様な状況を示し、加えて直上の灰色細砂層(11b層)との境界は粗砂と粘質シルトによる細かな互層状態となっている。そのため、明確な面として遺構検出を行うことができなかった。11a~c層は流水堆積層と考えられるが、これらの上位には暗オリブ灰色細砂混じり粘土層(10層)が堆積する。この上面では畦畔が確認され、恐らく既応の調査の第III'遺構面に対応すると考えられる。標高はT. P. +0.6m前後となっている。この遺構面で検出された畦畔は、直上の流水堆積層と考えられるオリブ黄色細砂層(9層)に覆われていて、良好な状態で残存していた。

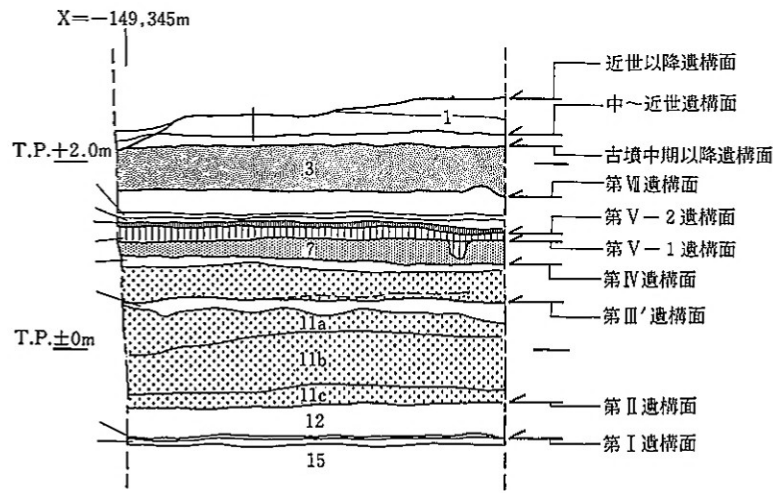
・第IV遺構面(弥生時代中期前半)

9層の上位に堆積するオリブ黒色粘土層(8層)の上面。標高はT. P. +0.8~1.0m前後であり、南東部が急激に落ち込んでいる。既応の調査では水田畦畔を検出しているが、今回の調査では不定型な土坑を1基検出したのみであった。第1・2次調査区域に比べやや低位に位置するために積極的な土地利用がなされなかったか、あるいは流水堆積層と思われる直上に堆積する黄褐色細砂層(7層)形成時に削平されてしまった可能性も考えられる。

・第V-1遺構面(弥生時代中期後半)

7層の上面からは溝・土坑・柱穴などの生活に伴うと考えられる遺構が多数検出された。これは既応の調査の第V-1遺構面に対応する。7層の直上には暗オリブ灰色粘質微砂層(6層)が堆積している。この層は凹線文土器を伴う弥生時代中期後半の土器包含層であり、この層の下面、つまり当遺構面で検出できた遺構は当該期に属すると考えられる。標高はT. P. +1.2m前後であり、第IV遺構面同様に南東部が落ち込む状況が看取される。

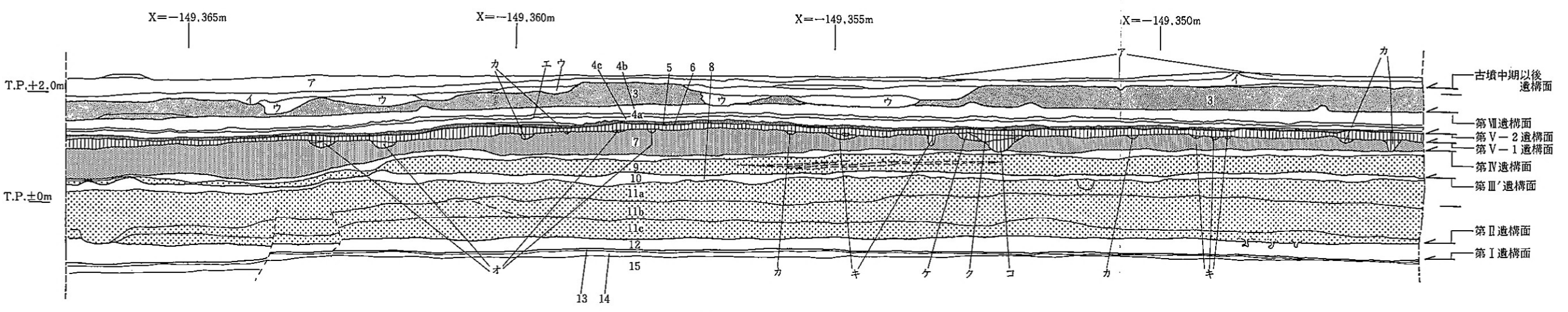
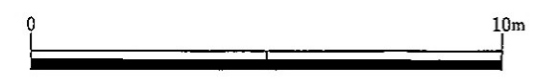
・第V-2遺構面(弥生時代中期末~後期初頭)



北西壁面

- 1. 灰色粘土(鉄分多い)
 - 1'. 灰色粘土(マンガン多い)
 - 2. 灰色粗砂混じり粘土
 - 3. 褐色砂礫
 - 4a. オリーブ黒色粘質シルト(上面に鉄分沈着)
 - 4b. オリーブ黒色粘土(植物遺体層)
 - 4c. オリーブ黒色粘土
 - 5. 緑黒色粘質微砂
 - 6. 暗オリーブ灰色粘質微砂
 - 7. 黄褐色細砂
 - 8. オリーブ黒色粘土(植物混じり)
 - 9. オリーブ黄色細砂
 - 10. 暗オリーブ灰色微砂混じり粘土
 - 11a. 灰オリーブ粗砂
 - 11b. 灰色粗砂混じり細砂
 - 11c. 暗オリーブ灰色微砂混じりシルト
 - 12. オリーブ黒色粘土
 - 13. 暗緑灰色粘土(黒斑含む)
 - 14. 黒色粘土
 - 15. 緑灰色粘土(黒斑含む)
- ア. 黒褐色粘質土
 - イ. 灰褐色粘土
 - ウ. 灰色粘土ブロック
 - エ. 灰オリーブ色粘土
 - オ. オリーブ黒色細砂
 - カ. 暗オリーブ灰色細砂
 - キ. 緑黒色粘土
 - ク. 暗緑灰色粘質微砂
 - ケ. 灰色微砂
 - コ. 灰オリーブ色細砂

- 砂礫層
- 細砂層
- 粗砂層
- 弥生中期末〜後期初頭
土器包含層
- 弥生中期後半
土器包含層



南西壁面

図4 層序断面図

6層の上面でも土坑・溝が検出されたが、これは既応の調査の第V-2遺構面に対応する。6層直上には緑黒色粘質微砂層(5層)が堆積している。5層中には、無文化の進行した中期末～後期初頭の移行期の土器群が含まれている。すなわち、当遺構面検出の遺構はこの時期に比定することができ、既応の調査では不分明であった第V-1遺構面との細かな時期差を土器型式によって確定することが可能である。この2つの遺構面の時間的關係については第III章第3項で詳述する。当遺構面の標高は約T. P. +1.4m前後である。

・第VII遺構面(古墳時代前期)

5層の直上にはオリブ黒色粘土・粘質シルト層が40cm程度堆積している。これらは4 a～c層の3者に細分が可能である。この内4 b層は薄い植物遺体の堆積で一つの面を形成している。この層の下面は既応の調査の第VI遺構面、つまり弥生時代後期の水田面に対応する可能性が高いが、土層断面を観察する限りでは畦畔等の遺構を確認することはできなかった。

その上位のオリブ黒色粘質シルト層(4 a層)の上面では流水堆積層と思われる褐色砂礫層(3層)に覆われた状態で水田畦畔が多数検出された。これが既応の調査の第VII遺構面に対応する。標高はT. P. +1.7～1.8mである。

・古墳時代中期以後

古墳時代中期以降の遺構面については、既応の調査との対応関係は不明確である。既応の調査とは別個に、今回の調査でそれぞれ検出を行った遺構面について述べたい。

3層の上面では落ち込み・溝・柱穴が検出された。時期については特定できないが、落ち込み内の埋土からは近世の瓦なども混じっていた。標高はT. P. +2.2m前後である。

3層直上の灰色粗砂混じり粘土層(2層)の上面でも落ち込み状の遺構や柱穴が確認されている。時期は近世に属すると考えられる。標高はT. P. +2.4m前後を測る。

2層の直上の灰色粘土層(1層)の上面では落ち込み状遺構が検出されている。時期は近世以後と思われる。標高はT. P. +2.6m前後である。

参考文献

- 1)大谷治孝 「第IV章第1節 層序」(『若江北』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)(財)大阪文化財センター 1983年
- 2)岸本道昭 「第II章第1節 層序の概要」(『巨摩・若江北(その2)』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査報告書)(財)大阪文化財センター 1984年

III. 各時代の遺構と遺物(巨摩遺跡)

1. 弥生時代中期

先述したとおり第16層暗灰色粘土層は弥生中期に属すると思われる粘土層でこの粘土層の上面が、流水堆積砂層の底面である。この流水堆積はよほど強い流れが想定され流水による侵食により面の凹凸が大変激しかった。また、南東隅に北東～南西方向の流路が検出されている。流路内には1 m近い粗砂の堆積が認められる。

〔弥生時代中期II〕

弥生時代中期の流水堆積層の中位に第13層暗青灰色微砂混粘土層が最大20 cmの厚さで確認され畦畔と流路が検出された。この畦畔は流路の肩部に検出されたもので、畦の上端30 cm、下端90 cm、高さ10 cm程度のものである。流路は幅5.5 m以上のもので、肩から5 mで一段下がり、最深部で40 cm以上に達する。以前の調査(巨摩その1、その2)では検出されていないことや、層序と遺構面の関係から基本層序で述べた上部流水堆積層(第10～12層)により形成されたものかもしれない。トレンチ北西側には幅70 cm、長さ2 m、深さ5 cm程度の浅い溝状遺構が検出されている。

この層は流水堆積砂層中に形成された粘土層を利用した短期間の水田面と考えられるが、巨摩遺跡と若江北遺跡においても確認されている層で、両遺跡の全域に広がる水田面であった。若江北遺跡の一部には2面確認されている水田面である。

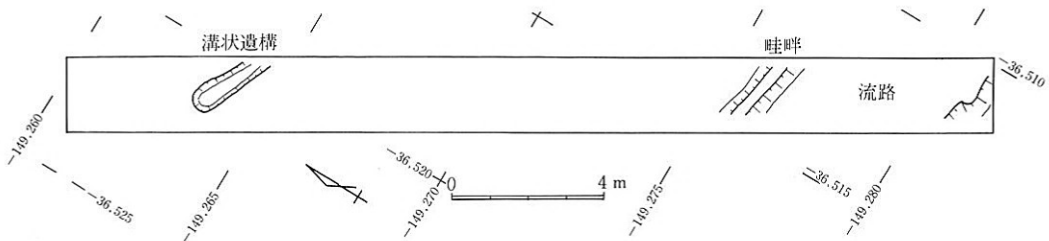


図5 第7遺構面(弥生時代中期II)

2. 弥生時代中期～後期

第9層灰黒色粘土層で弥生式土器の包含層の分布を確認したのみで、層中には遺物の出土を全く見なかった。今回の若江北遺跡の調査において弥生時代中期末～後期初めの包含層とした層である。若江北遺跡においては多くの遺物が出土したことから注意して調査を行ったが、層中に遺物は含まれていなかったが、包含層として対応すると考えている。

若江北遺跡(その3)の調査では第9層の下面で中期集落面を検出しているが、巨摩遺跡側では、全く遺構が検出されていない。

また、弥生時代後期の遺構面と思われる、第9層の上面と第8層の上面においても、全く遺構が検出されなかった。

3. 古墳時代前期

古墳時代の水田面は3面検出された。

最下位に位置する水田面Ⅲは第7層青灰色粘土層をベースとして形成され、畦畔遺構は検出できなかったが、足跡が認められたことから水田面と推定した。足跡内には砂層が入っており、第2次調査の水田面Ⅰに対応する、古墳時代初頭(庄内式土器期)の遺構面である。

中位に位置する水田面Ⅱは第5層青灰色シルト層をベースとして形成され、トレンチ全体で面

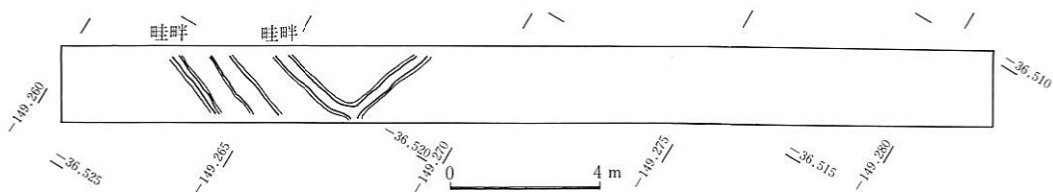


図6 第2遺構面 水田面Ⅰ

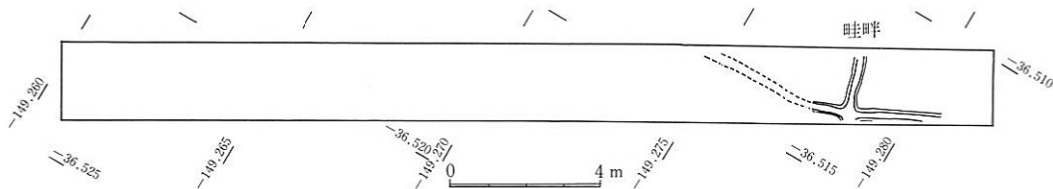


図7 第3遺構面 水田面Ⅱ

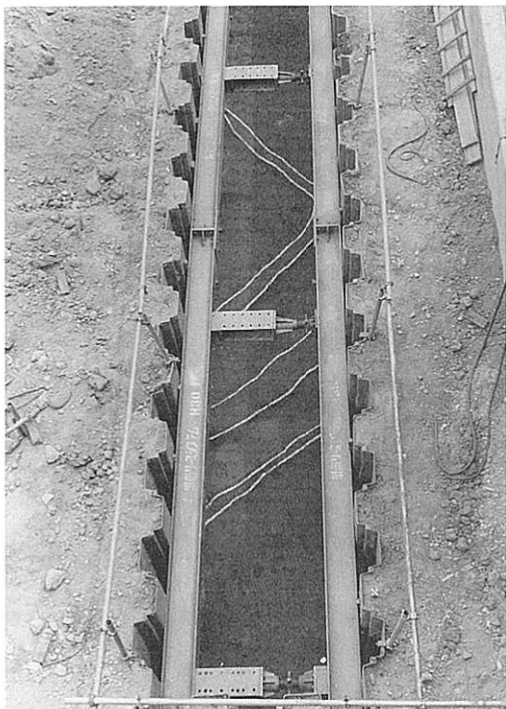


写真2 水田面Ⅱ 畦畔

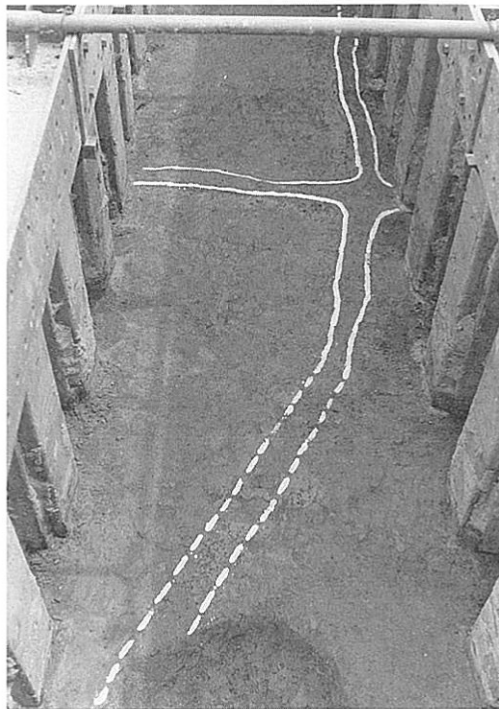


写真3 水田面Ⅱ 畦畔

は検出されたが畦畔は一部にしか検出できなかった。畦畔はトレンチ南東部に「L」字状に検出された。畦畔は二条で、ほぼ南北方向に走るものと東西方向に走るものの交差部であった。畦畔は上端20～30cm、下端34～40cm、高さ約10cm程度であった。

最上位に位置する水田面Ⅰは第2次調査で古墳前期水田面Ⅲとする薄い粘土層に形成された、布留式期の水田であり、第1次調査では検出を見なかった面である。今回の調査においても、あまり安定した層ではないために、トレンチ中央で途切れていた。これは流水堆積層の下部に形成された青灰色シルト層を利用して水田面としたものである。

4. 歴史時代

第2層流水堆積砂層上面をベースとして形成される面で、井戸2基、土坑1基が確認された。井戸1はトレンチ中央において検出され、井戸2はトレンチ北西隅で検出された。

井戸1はプランは不整円形で上端3.5m、下端0.8m、推定の深さ0.6mのもので、最下部に曲物が一段残存している、曲物井筒の井戸であった。曲物は0.3mの径で、残存部の高さ10cmのものであった。曲物内の底部から土師器の小皿が出土している。

井戸2はプランは円形で上端0.8m、下端0.4m、深さ0.8mのもので、最下部に曲物が三段残存している、曲物井筒の井戸であった。曲物の径は、最上段が0.36m、中段が0.34m、最下段が0.3mであった。曲物は上段・中段とも高さ8cm、下段は14cmのものであったが、腐食が激しく取り上げに失敗した。

土坑は最大幅3.6m、深さ0.5mのもので、調査時は土器溜めと呼称したように遺物が多量に出土した。土坑を検出した時点では殆どの遺物が取り上げられた状態で正確な出土状況は確認できていないという調査ミスがあった。出土状況を推測すると、遺物は土坑上部に集中していたようである。

第1層暗褐色粗砂混粘土層は厚さ20cm程度の歴史時代遺物包含層で特にトレンチ中央の井戸1周辺に集中的に分布していた。掲載した出土遺物には包含層出土のものが混在している。

図9の出土遺物は井戸1から出土した土師器小皿である。

この小皿は口縁部を「外反」させ、端部を内側に折り返すことにより肥厚するものであり、時期は11世紀末から12世紀初であろう。



図9 井戸1 出土遺物

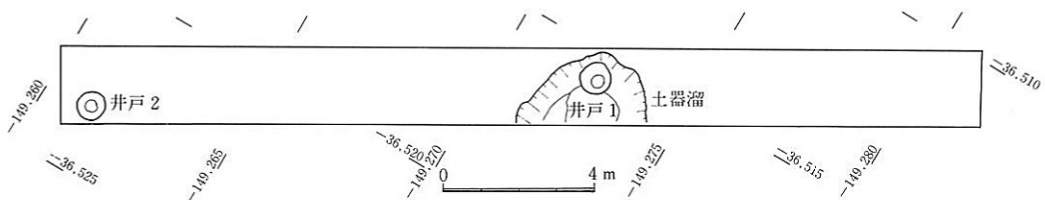


図8 第1遺構面

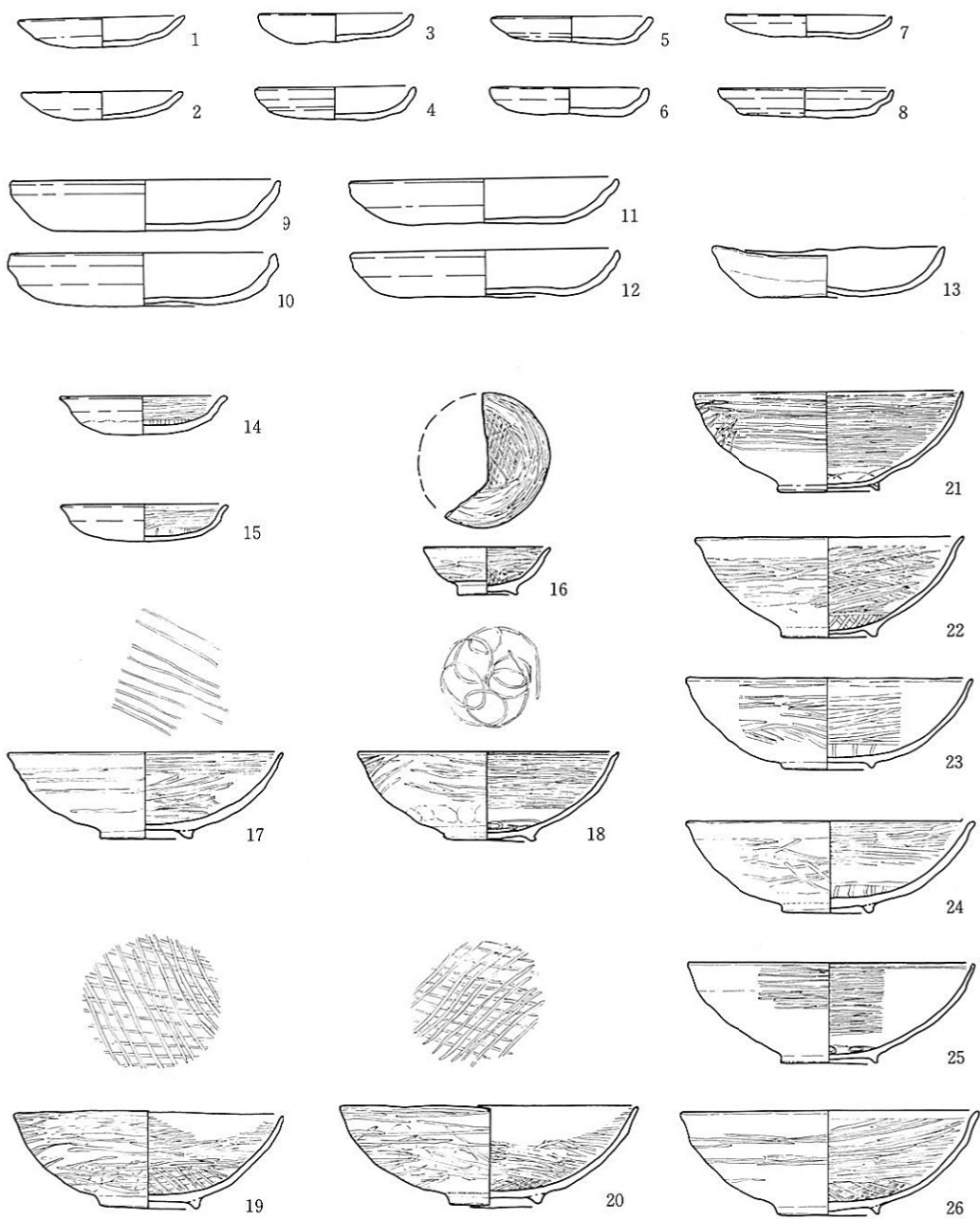


图10 土坑出土遗物

図10で掲載した遺物は、土師器小皿8点、土師器大皿4点、粗製の土師器大皿1点、瓦器小皿2点、瓦器小椀1点、瓦器椀10点である。

瓦器椀の見込み部の暗文は、「斜格子」4点、「らせん」3点、「平行文」3点である。見込み部の文様が「らせん」のもの3点は口縁端部内面に沈線が認められるものである。

瓦器小椀は口径7.1cm、器高2.7cmのもので、口径は「二寸五分」弱にあたる。

遺物の所属時期は12世紀から13世紀のものがあり、これは包含層遺物と土坑遺物が混在したことによると思われる。

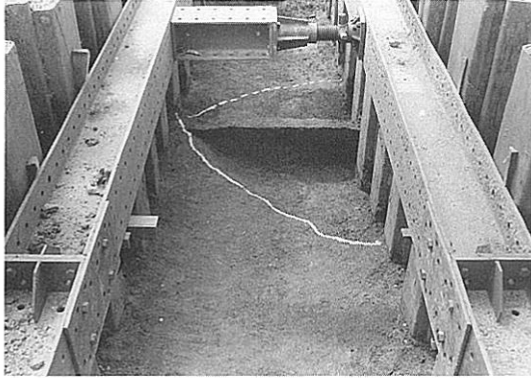


写真4 土器溜

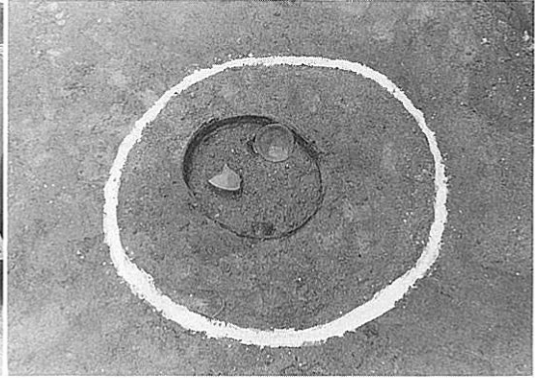


写真5 井戸1 遺物出土状況

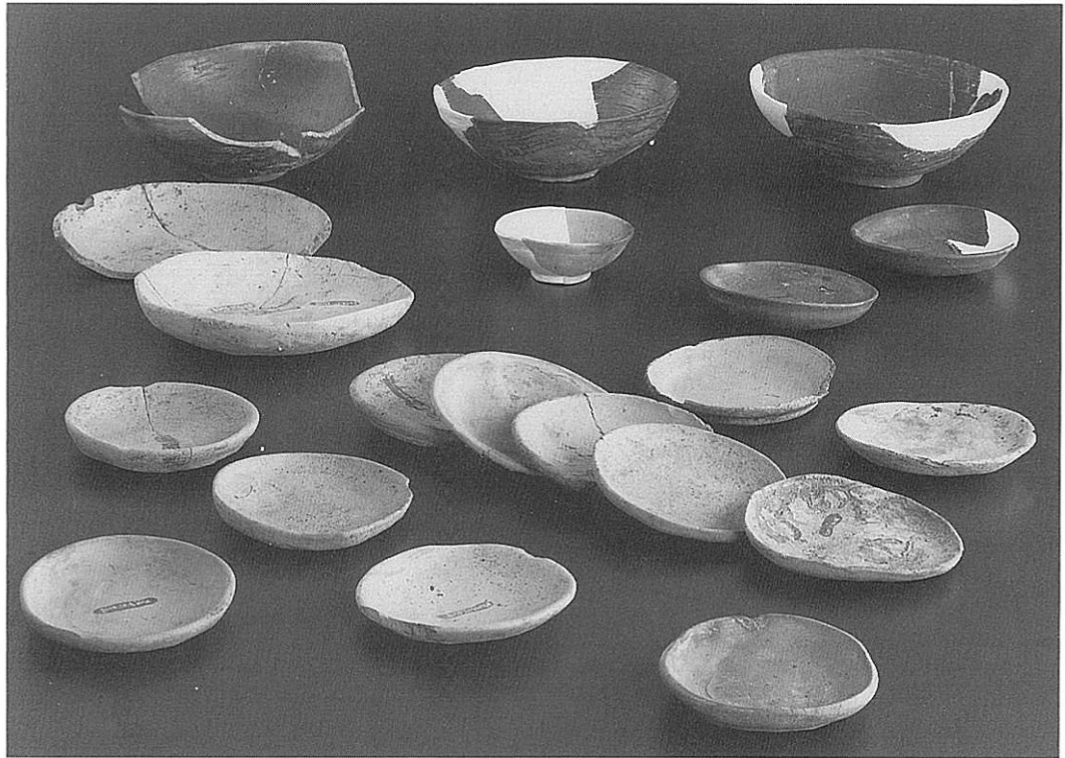


写真6 土坑出土遺物

IV. 各時代の遺構と遺物(若江北遺跡)

1. 弥生時代前期～中期前半

①弥生時代前期

・第Ⅰ遺構面

弥生時代前期、つまり第Ⅰ遺構面においては、先述のように遺構・遺物共に検出することが出来なかった。ベースとなる層自体が2～4cmと極めて薄い堆積であること、隣接する第1次調査a-3トレンチに比べ20cm程度標高も低くなっていることなどから、当該期には今回の調査区域まで土地利用が及んでいなかったと推定される。

ベースとなる層およびその直上の層からは、当該期の遺物は一切出土していない。

②弥生時代中期前半

・第Ⅱ遺構面(図11, 写真7)

中期前半に位置づけられる第Ⅱ遺構面では、溝状の落ち込み1条と土坑2基が検出されている。溝201は調査区北西寄りに位置する東西方向の溝状遺構である。平面形態は不整形で幅120cm程度であるが、東にゆくほど幅狭になり先端は丸く収まってしまう。また中ほどから両側に向かって幅60cm程度の溝状遺構が分岐しているが、これも短いものである。深さは5cm程度と浅くなっており、断面形態は半円形を呈する。埋土は灰色の細砂と微砂が細かく互層状に混じりあったもので、流木碎片と思われる植物遺体を含んでいる。形態の不整形さを考え合わせると、小さな落ち込み状の自然流路の一部と考えるのが妥当であろう。調査区中央から南東寄りに検出された土坑201・

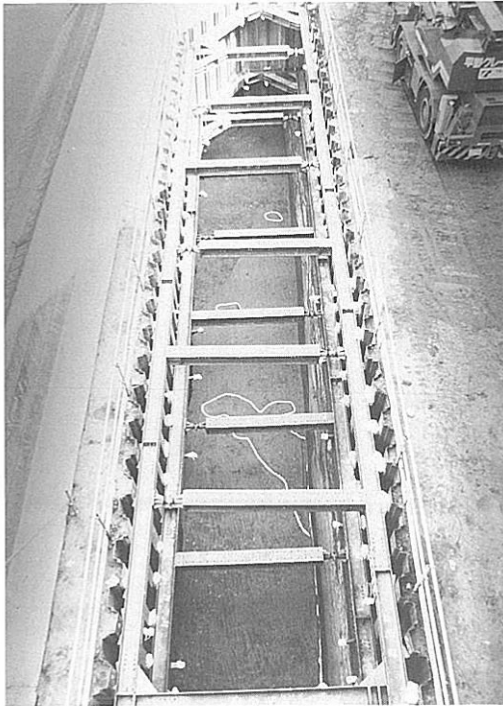


写真7 第Ⅱ遺構面

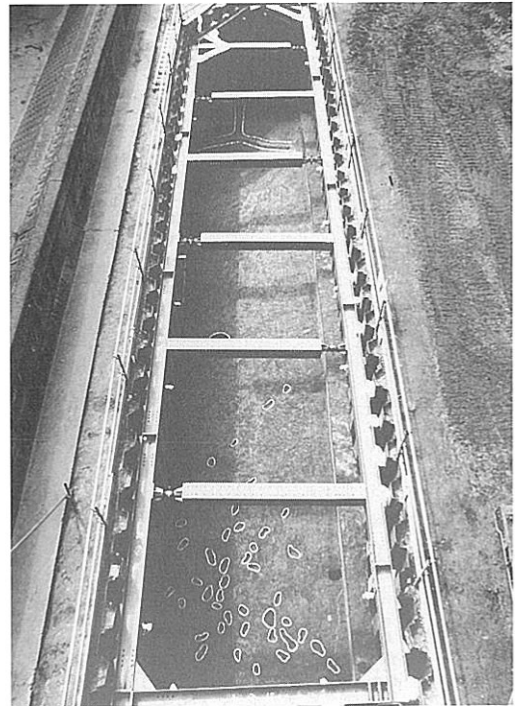


写真8 第Ⅲ'遺構面

202も平面形態が不整形であり、深さ5cm程度で、双方とも埋土は溝201と同質であることから、自然地形の落ち込み部分の一部と考えられる。

以上のような状況は、この遺構面に関しても人為的な遺構や開発の痕跡は認められなかったということを意味している。第II章で述べたように直上の流水堆積層から当遺構面に向けてカニ穴が複数掘られている状況が確認され(図4)、この時期当調査地域は浸水状態にあった可能性が高い。当該期の土地利用の痕跡が確認されないことは、当調査区域の自然条件に要因があると考えられる。

・第三'遺構面(図12, 写真8)

中期前半と考えられるもう一つの遺構面、第三'遺構面では、調査区南東部に畦畔301~4が検出され、水田面であったことが確認された。粗砂を中心とした流水堆積層によって覆われており良好な状態で畦畔が検出されている。畦畔301は高さ15cm前後と明瞭なものであったが、その他は高さ5~10cm程度である。当遺構面では第2次調査でも水田畦畔が検出されているが、これに対応する水田面と考えられる。いずれにしても、大畦畔と呼べるほどの規模ではなく、最小の水田区画を示す畦畔と考えられる。調査区北東~中央部では畦畔は検出されなかったが、これについては洪水によって削平をうけた為と想定している。また、北東部では長軸が20~30cm程度の楕円形を呈し、深さ5cm程度の小さな窪みが多数検出されている。これらは、一定程度列状に検出されることから足跡痕と考えられる。足跡痕としては平面形態が不鮮明なのは、削平によって上面が失われてしまったためと考えられる。

・第四遺構面(図13)

第四遺構面も中期前半と考えられるが、土坑401を1基検出したのみであった。この遺構面では第1・2次調査で明確な水田畦畔が検出されているのだが、今回の調査では平面検出・断面観察いずれにおいても畦畔らしき遺構を確認することはできなかった。当調査区域内では水田自体が形成されなかったか、あるいは流水堆積層と考えられる上層の黄褐色細砂層(7層)が形成される際に削平されてしまった可能性の両方が考えられる。

これら中期前半に属すると考えられる各遺構面の遺構埋土、基盤層などからは土器・石器・木器などの遺物は一切出土していない。各遺構面間に存在する流水堆積層から流木碎片と考えられる植物遺体が検出されるのみであった。この事実は、当該期を通じて当調査区域が主要な生活域として機能していなかったことを物語っていると考えられる。

2. 弥生時代中期後半~後期初頭

①弥生時代中期後半

・第V-1遺構面

[遺構](図14・15, 写真9)

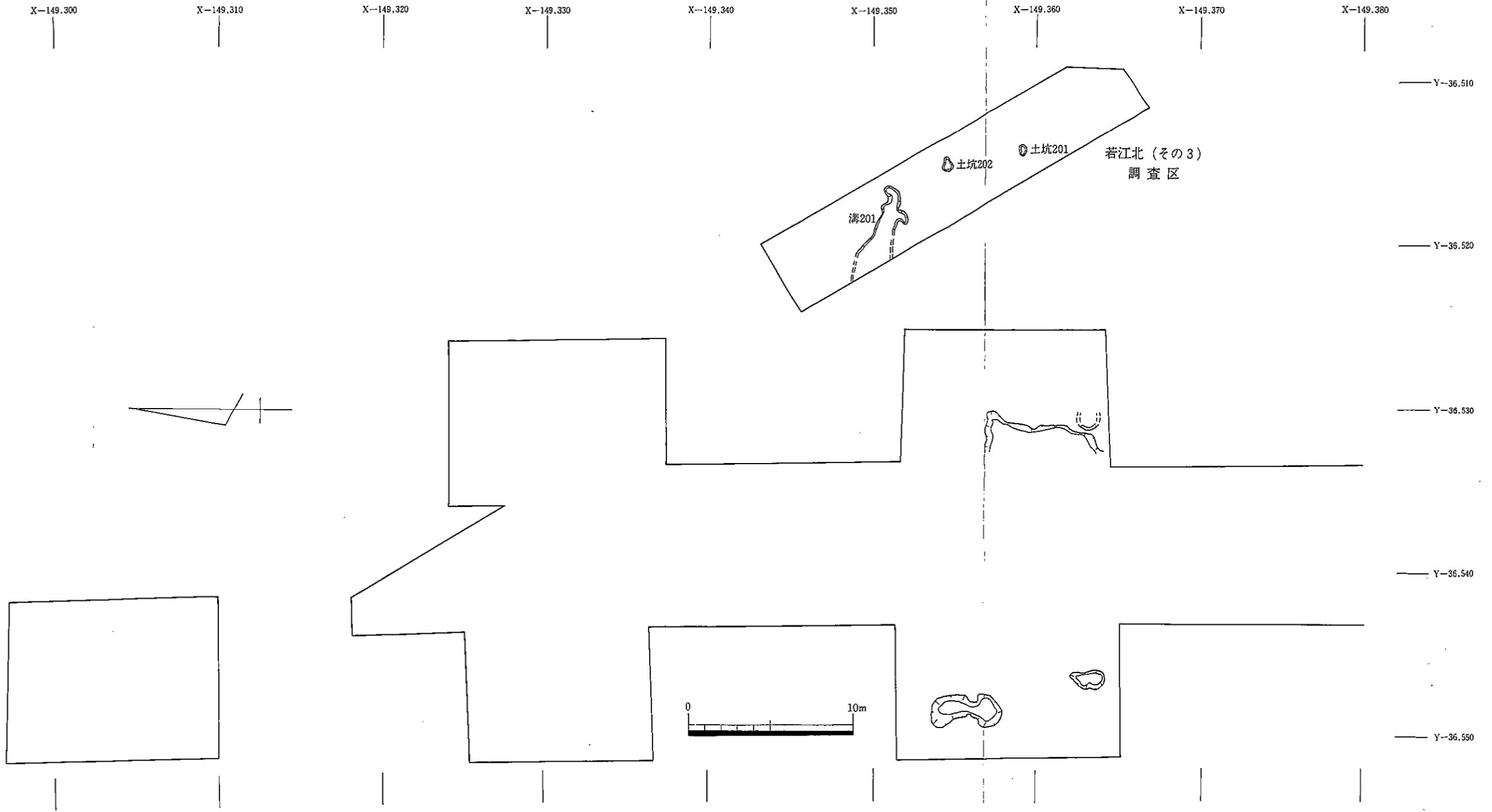


図11 第II遺構面 遺構配置図

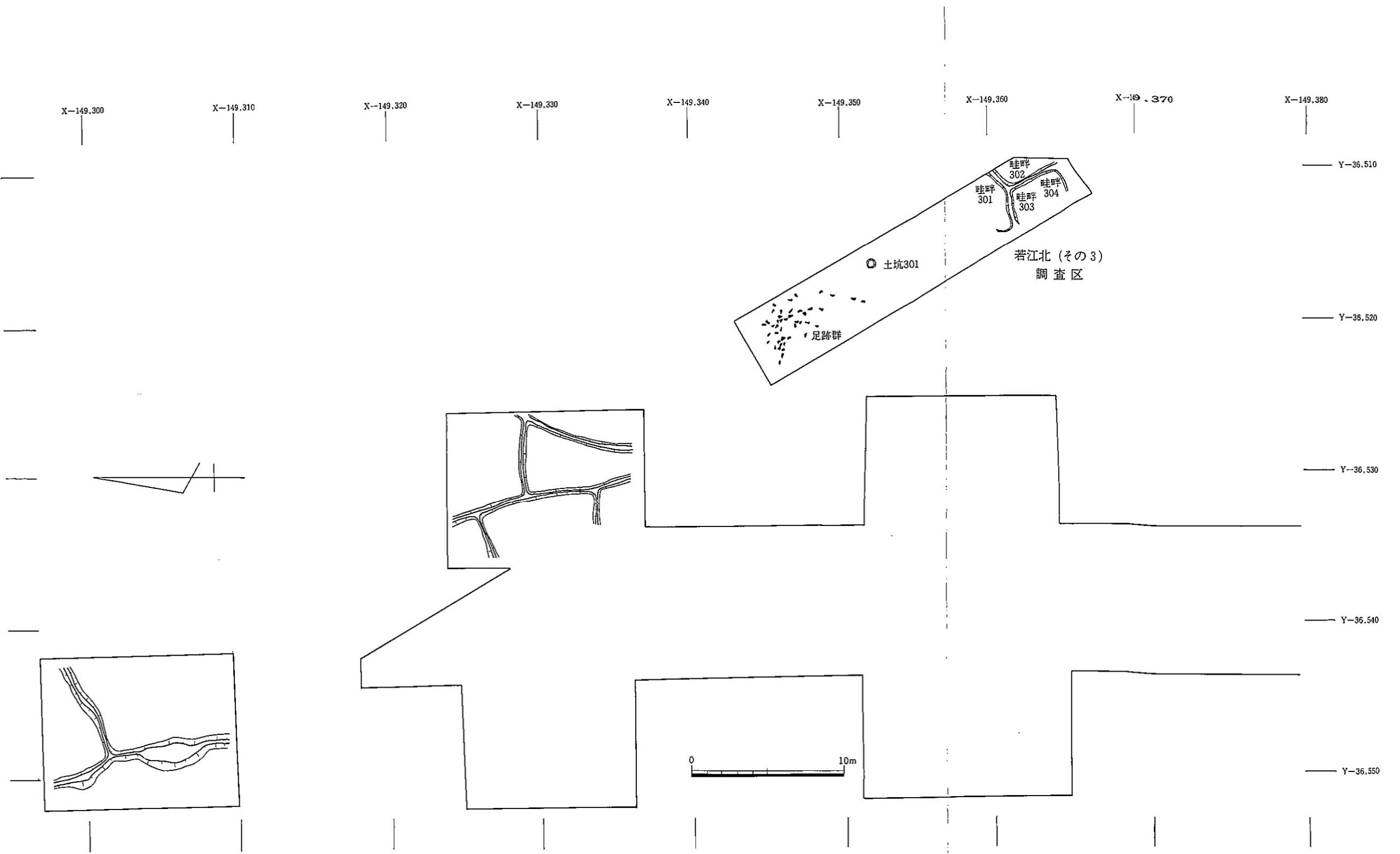


図12 第III' 遺構面 遺構図

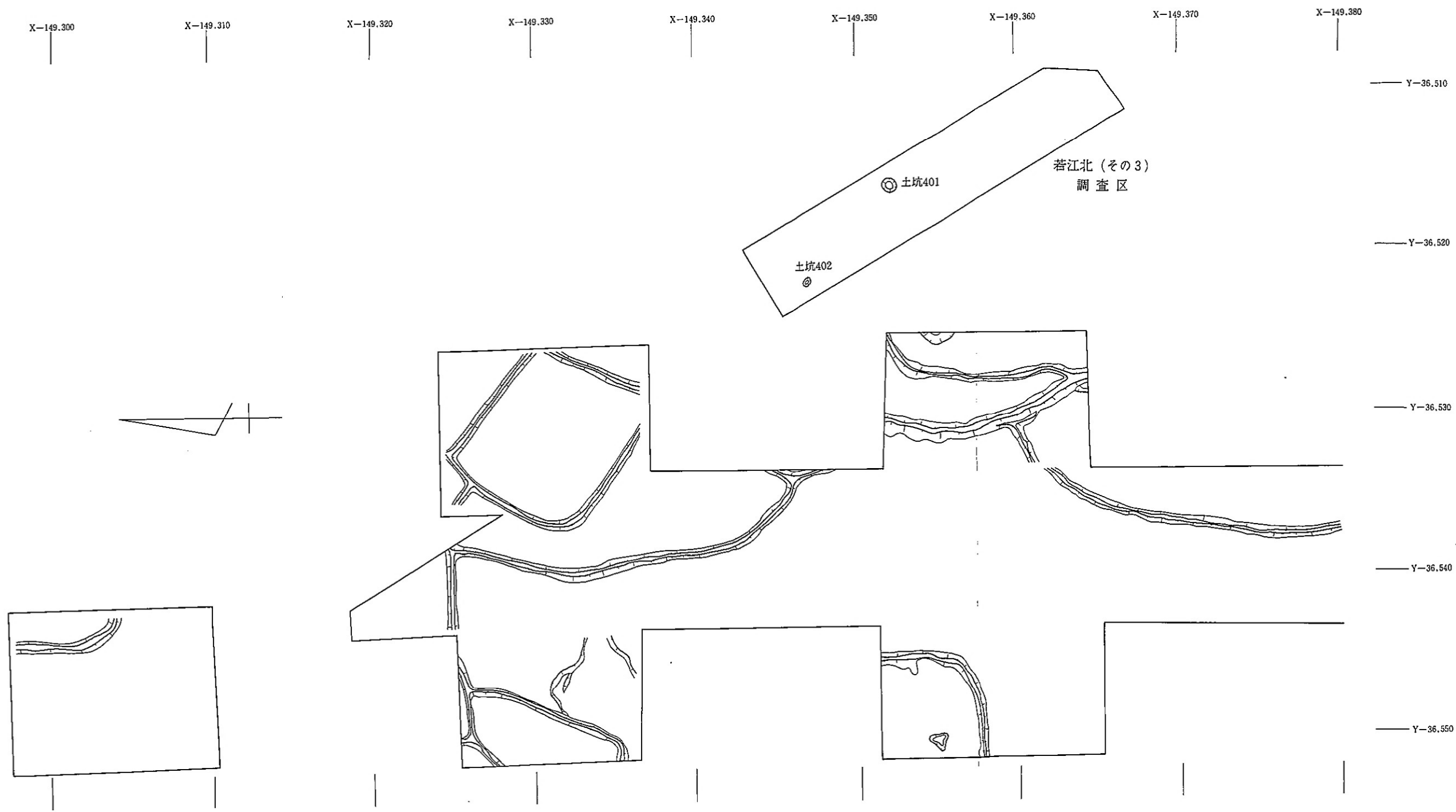


図13 第IV遺構面 遺構図

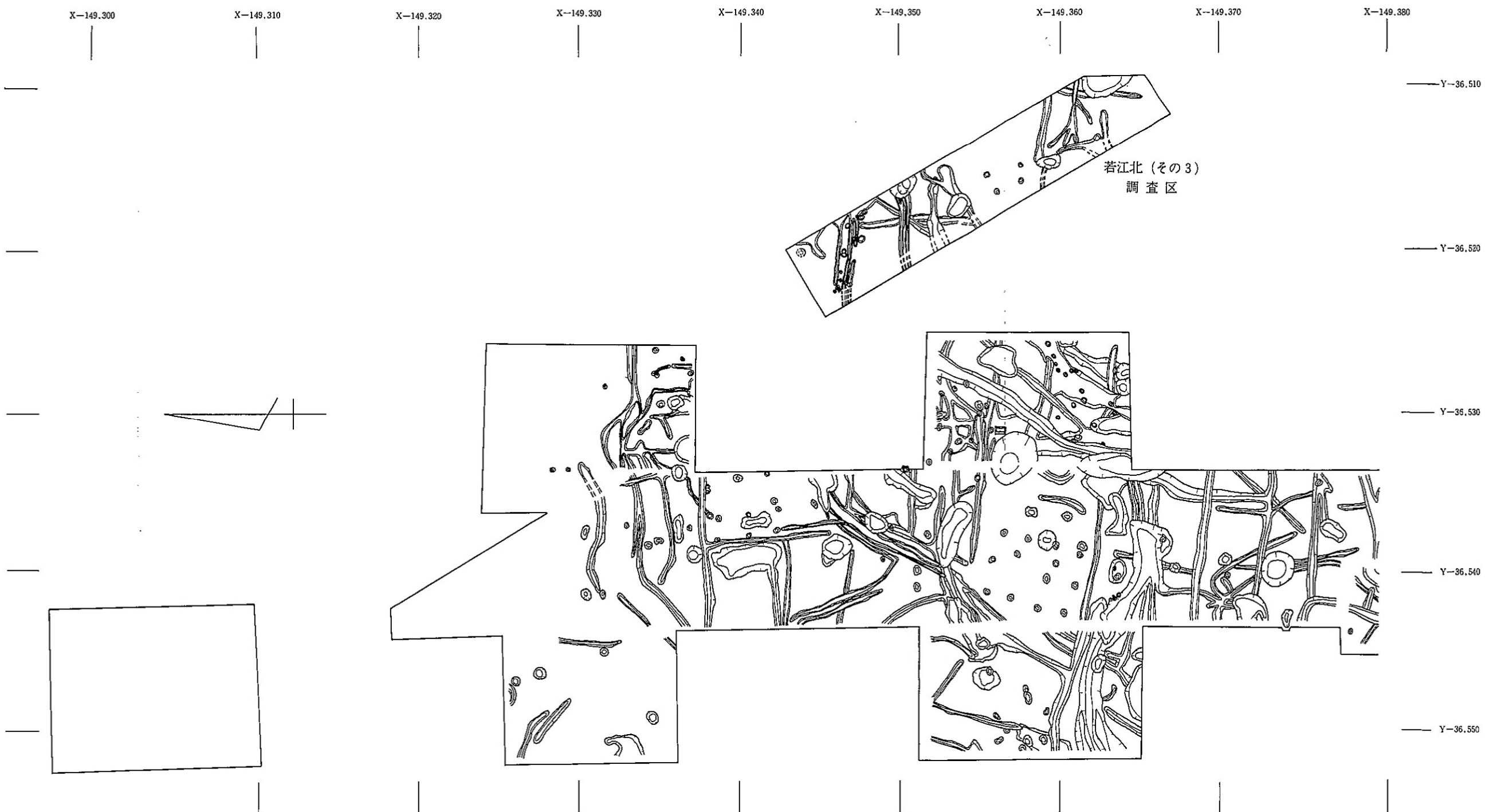


図14 第V-1 遺構面 遺構配置図

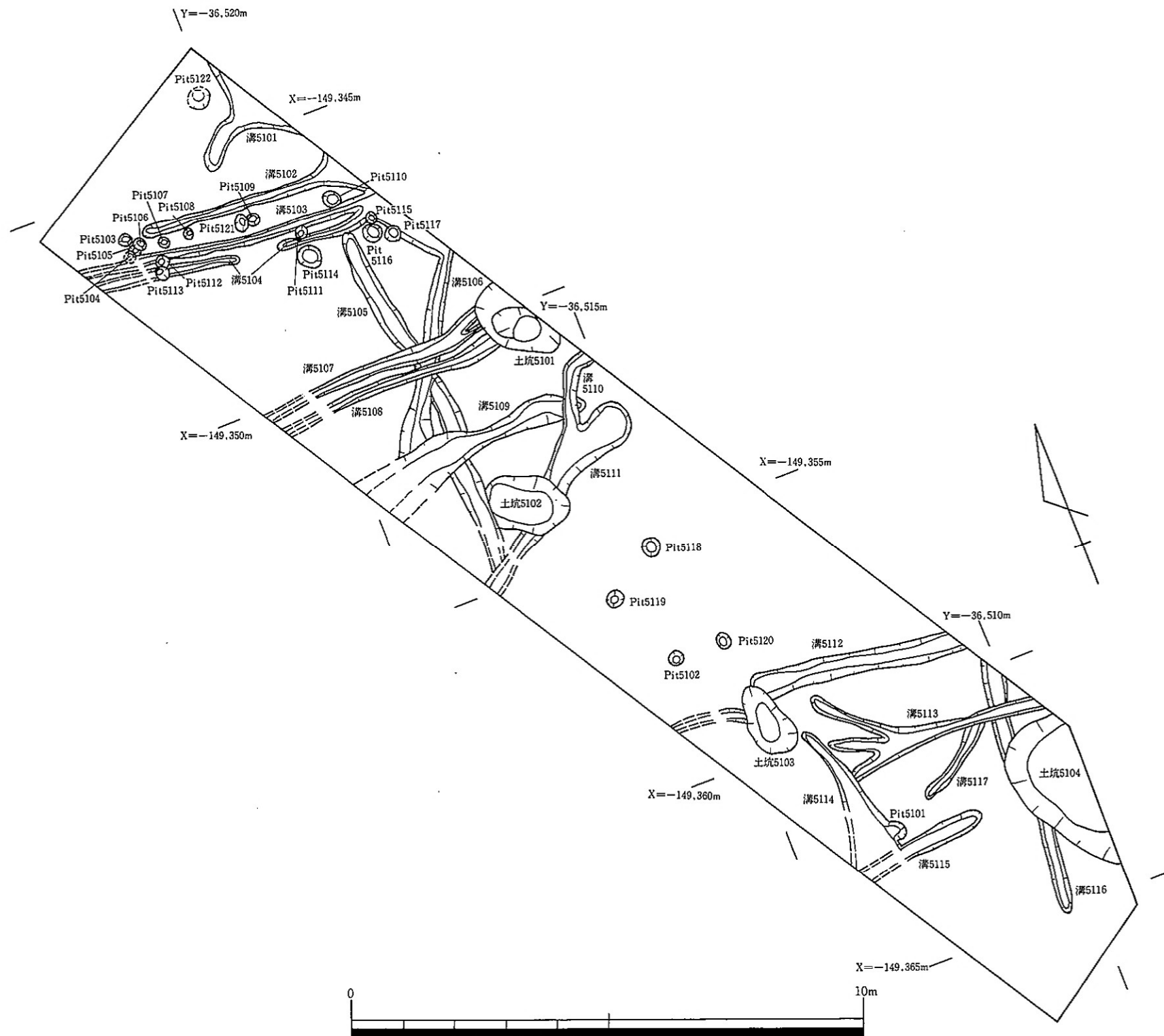


图15 第V-1 遺構面遺構実測図 (S=1/100)

① 溝

遺構名	方向性	断面形態	幅	深さ	埋土	備考
溝5101	北東～南西	半円形	36	5	暗緑-灰色粘質微砂	調査区北東壁面近辺で幅が大きく広がる。
溝5102	東～西	半円形	15～76	3～5	暗緑-灰色粘質微砂	調査区北東壁面近辺で幅が広がる。
溝5103	東～西	半円形	13～20	5～15	暗緑-灰色粘質微砂	
溝5104	東～西	半円形	20	5	暗緑-灰色粘質微砂	
溝5105	北～南	逆台形	30～55	5～10	暗緑-灰色粘質微砂	平面形態はやや不整形で曲線的である。
溝5106	北東～南西	逆台形	16～52	15	暗緑-灰色粘質微砂	
溝5107	東～西	半円形	18～34	5	暗緑灰色粘質微砂	土坑5101と接する付近で2条に分岐する。
溝5108	東～西	半円形	14～16	4	暗緑灰色粘質微砂	
溝5109	東～西	U字形	24～85	4～35	暗緑灰色粘質微砂	底面高が一定せず、東端付近で急激に落ち込む
溝5110	不定	半円形	25	7～8	緑黒色粘土	溝5111から分岐する。
溝5111	北東～南西	半円形	28～72	5～12	緑黒色粘土	北東端で幅が広がり、完形土器が埋置される。
溝5112	東～西	半円形	32～44	5～10	暗緑灰色粘質微砂	
溝5113	不定	半円形	24～48	5	緑黒色粘土	西端で3条に分岐する。
溝5114	北～南	逆台形	20～44	5～8	暗緑灰色粘質微砂	調査区南西端で幅が広がる。
溝5115	東～西	半円形	24～48	5	暗緑灰色粘質微砂	
溝5116	北～南	半円形	26～48	3～5	暗緑灰色粘質微砂	
溝5117	東～西	半円形	38～42	7～10	暗緑灰色粘質微砂	

② 土坑

遺構名	平面形態	長軸	短軸	断面形態	深さ	埋土	備考
土坑5101	不整楕円形	175	112	半円形	40	暗緑灰色粘質微砂	北西部の立ち上がりにテラスを有する。
土坑5102	不整楕円形	165	108	半円形	25	暗緑灰色粘質微砂	
土坑5103	不整楕円形	144	76	U字形	36	緑黒色粘土	
土坑5104	不整楕円形	335	205	逆台形	42	緑黒色粘土	埋土中位の炭化物層に土器を一括廃棄する。

③ 柱穴

遺構名	平面形態	直径	深さ	埋土
Pit5101	不整円形	24	26	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5102	不整円形	24	14	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5103	不整円形	22	3	暗緑灰色粘質微砂
Pit5104	円形	22	6	暗緑灰色粘質微砂
Pit5105	不整円形	17	3	緑黒色粘土
Pit5106	不整円形	25	4	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5107	円形	19	3	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5108	円形	15	4	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5109	円形	25	4	暗緑灰色粘質微砂
Pit5110	不整円形	34	5	暗緑灰色粘質微砂
Pit5111	不整円形	26	5	暗緑灰色粘質微砂

遺構名	平面形態	直径	深さ	埋土
Pit5112	不整円形	25	15	暗緑灰色粘質微砂
Pit5113	不整円形	27	25	暗緑灰色粘質微砂
Pit5114	不整円形	42	8	暗緑灰色粘質微砂
Pit5115	円形	22	11	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5116	不整円形	30	6	暗緑灰色粘質微砂
Pit5117	不整円形	28	5	暗緑灰色粘質微砂
Pit5118	不整円形	29	15	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5119	不整円形	29	26	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5120	不整円形	27	16	暗緑灰色粘質微砂
Pit5121	不整円形	32	3	暗緑-灰色粘質微砂
Pit5122	円形	48	18	緑黒色粘土

長軸・短軸・直径・深さの数値の単位は全cmである。

表2 若江北遺跡V-1遺構面検出遺構一覧

当遺構面は先述の黄褐色細砂層(7層)の上面に相当し、溝16条・土坑4基・柱穴20基と多数の遺構を検出した。その個別の内容については表2の遺構一覧表に示しており、ここでは遺構形成の概略を中心としながら主要遺構についてのみ説明を行う。

当遺構面の特徴として、比較的小規模な溝が多数検出されていることが挙げられる。これらの溝については2種類に大別することが可能である。一つは幅20cm前後・深さ5cm程度で断面形態が半円形を呈し、平面では比較的直線的に伸びる形態をとるタイプである。溝5102・5103・5104・5105・5106・5107・5108・5112・5113・5115・5116などがそれにあたる。これらは、溝5106を除いてすべて東西あるいは南北といった規格的な方向性をもつことが特徴と言えよう。中でも近接しながら並行する溝5102・5103・5104の付近には、それらに沿って列状に柱穴が集中していることが看取できる。このことから、この種の溝は何らかの建物に付属する遺構と思われる。

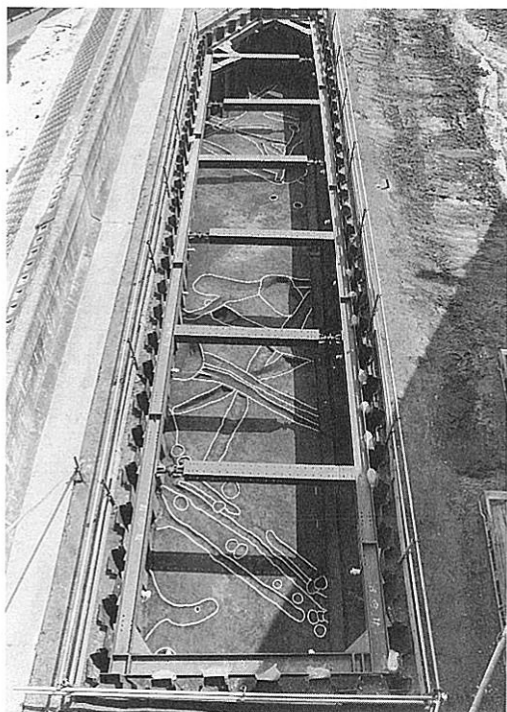


写真9 第V-1遺構面

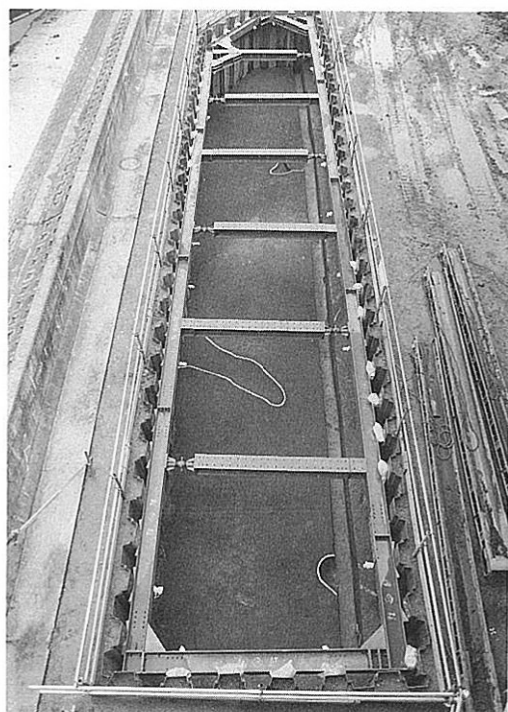


写真10 第V-2遺構面

もう一種の溝は、平面形態が不整形で幅・深さ共に一定しないものである。溝5109・5110・5111・5114がそれに相当する。これらは方向にも規模にも規格性が存在しない。人為的な遺構ではなく落ち込み状の自然流路とも考えられ、先の規格性をもつ溝とは全く性格が異なる。両種の溝には土器型式上の明確な時間的差異は見られない。しかし、埋土の状況からは溝5109は溝5105・5106を、溝5114は溝5113をそれぞれ削平しているように観察された。つまり、2種類の溝は同時存在していたのではなく、建物に付随する規格性の高い小溝群が埋没した後に不整形な溝が形成された可能性が想定できる。

土坑については4基確認されているが、特に目をひくのが土坑5104である。調査区域の制約か

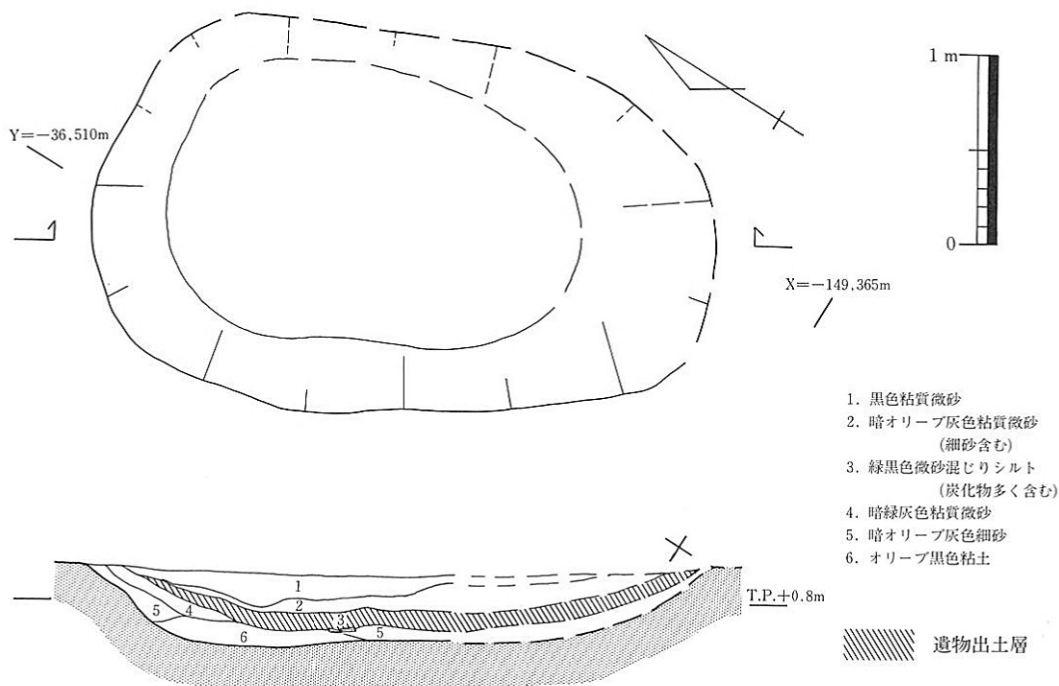


図16 土坑5104平面・断面図

ら、ほぼ半分しか検出できていない。そのため平面形態は確定できないが、恐らく長軸3.5m、短軸2.2m程度の楕円形を呈すると考えられる。土層断面(図16)を観察すると、埋土の中位に多量の炭化物を含む層が存在するが、この層からは第IV様式に比定される土器の一括資料(図18)が出土した。

柱穴は、調査区北東部に列状に集中する先述の柱穴群と、調査区中央部に位置する1群とが検出されている。いずれも建物としてのまとまりを明確にするものではない。

[遺物]

当遺構面出土の遺物は、大半が土器片であり石器・木器は殆ど出土しなかった。遺構内出土の資料を中心に説明する。

溝5111出土土器(図17)

当遺構を南東壁面で検出した部分で出土した。遺構底面からは浮いた状態で、埋土上位に底部を下にして据え置かれた状態で出土している。検出時の状況では、胴部上半は失われてしまっている。しかし、周囲に散らばる土器片の大半はこの土器に接合する。本来は正体して据え置かれた壺形土器の頸～胴部上半が破砕してしまったものと考えられる。

出土した土器(図17)は、小型の直口壺である。口縁直下の櫛描文は器面剝落のため判然としなが、おそらくは6帯の櫛描文を有すると考えられる。この櫛描文は一見直線文のように見えるが、微妙に櫛描原体を停止しながら施文していることから、簾状文の稚拙なものとも言える。

5条で幅0.9cmの櫛描文原体を用いて施文している。外面の調整については、胴部中位は6分割の単位をもった横方向のヘラミガキ調整によって、胴部下位は縦方向のヘラミガキ調整によって仕上げられている。内面の調整は胴部中～下位は横方向のヘラミガキ調整、上位はナデ調整によ



写真11 溝5111断面状況

て仕上げられる。胎土については、角閃石を含み色調が暗茶褐色であることから生駒西麓産と考えられる。

土坑5104出土土器(図18)

先述のように、埋土中位の炭化物層からは土器が一括出土している。1は小形の台付鉢の口縁部と考えられる。口縁部はヨコナデ調整により上端に面を作りだし、外面の端部直下には凹線文風に帯状の凹みを形成している。体部外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整で仕上げられている。

2・3は坏部が碗状形態を呈する高坏である。2には木製工具による列点が口縁部直下にめぐらされており、一部はヘラミガキによって消されている。坏部の下半もヘラミガキで仕上げられていて、生駒西麓産の胎土で作られている。3は口縁部直下に3条の凹線文を施している。これも凹線文間にヘラミガキ調整を行う。坏部の下半はヘラケズリ後に縦方向のヘラミガキ調整、その後横方向のヘラミガキ調整を行っている。口縁端面に1箇所だけ2条で1単位の刻みが施されることが特徴である。坏部内面下半は縦方向のヘラミガキ調整を放射状に施し、上半はヨコナデ調整により仕上げられる。色調は淡黄褐色を呈する。

4・5は鉢である。4は直口する形態を取り、口縁外面直下に1条、屈曲部に2条の凹線文を配する。凹線文間にはヘラミガキ調整を行う。外面体部下半はヘラケズリ後放射状のヘラミガキ、内面では上半に横方向、下半は放射状のヘラミガキ調整で仕上げを行う。色調は淡黄褐色となっている。5は口縁部が屈曲して外反する形態をとる。体部外面には、ハケ調整を行った後下半部

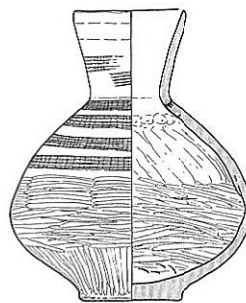
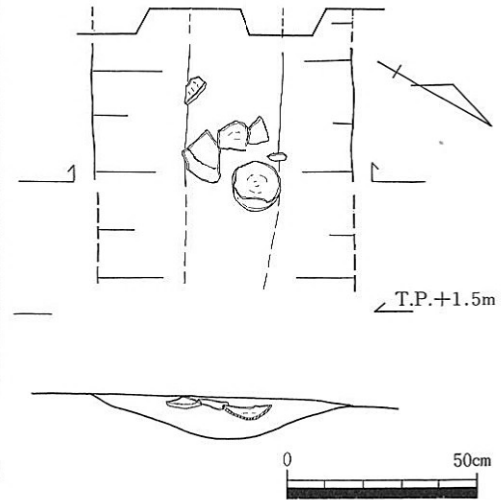


図17 溝5111土器出土状況と実測図

はヘラケズリ後ヘラミガキ調整を行う。内面はハケ後ナデ調整仕上げである。口縁部は強いヨコナデ調整により面をもち、端部はハネ上げ気味となる。胎土は生駒西麓産と考えられる。

6～8は甕である。6・7は中型の甕で、両者ともに外面がヘラミガキ調整によって仕上げられている。内面はハケ調整をおこなうが、6ではその後にナデ調整が行われる。いずれも生駒西麓産の胎土である。8は明瞭な屈曲により口縁部を外反させる形態をとる。外面はハケ調整、内面はハケ後ナデ調整が行われ、口縁部には強いヨコナデ調整が行われる。これも生駒西麓産の胎土である。

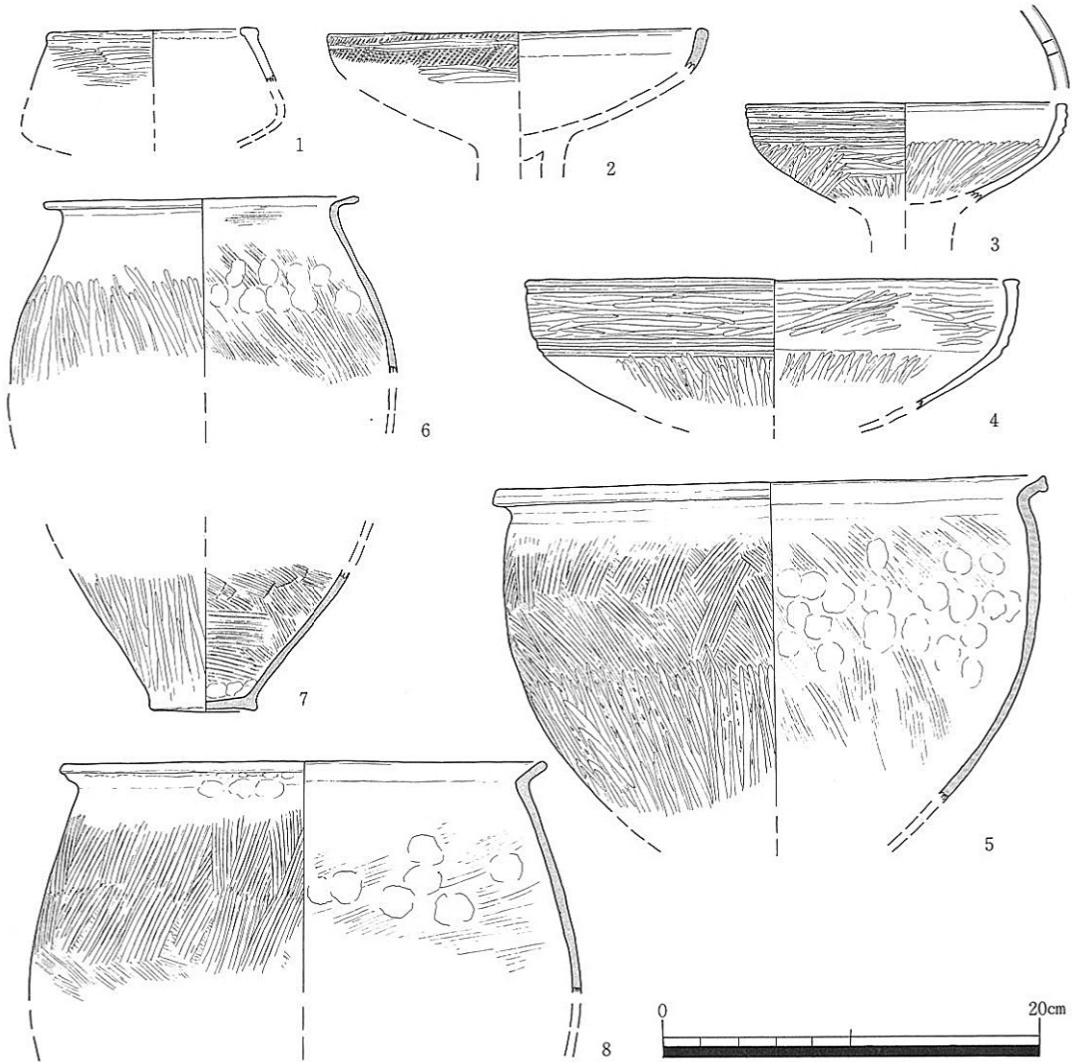


図18 土坑5104出土土器(1/4)

溝5106出土土器(図19・9)

遺構の底面ではなく、埋土の上位から単独で検出されている。高坏の脚部で、口縁部に水平縁を有する形態の坏部に付属すると考えられる。坏部は失われていたものの、脚部だけは完存した

状態で出土している。外面はハケ後ヘラミガキ調整、内面の上半は未調整で絞り痕が顕著に見られる。下半は単位の明瞭な横方向のヘラケズリ調整で仕上げられている。胎土は生駒西麓産である。

以上が第V-1遺構面の遺構内出土の主要な土器である。この他に中期後半に属する遺物としては、この遺構面の上面に堆積する6層内に含まれる土器群が挙げられる。細片を中心としているものの、層位的な同時性の明確な資料であるためここに提示したい。

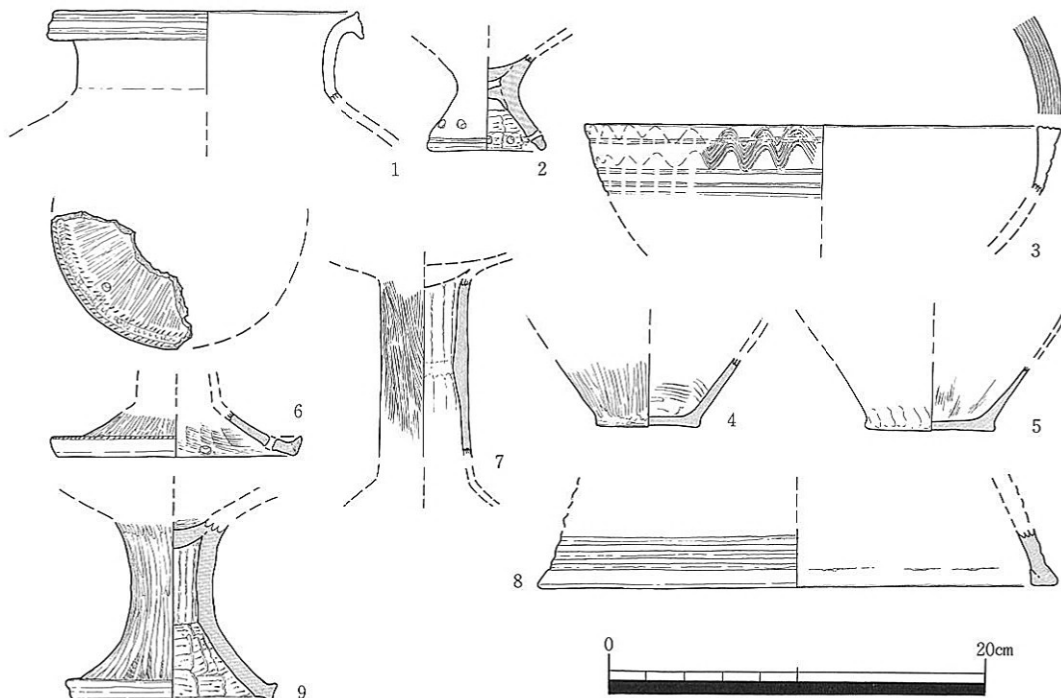


図19 溝5106出土土器(9)と6層出土土器

6層出土土器(図19・1～8)

1は、一般に壺Dと呼ばれる無文の壺の口縁部と考えられる。口縁端面には凹線文が2条施されており、端部はナデ調整によりはね上げ状に仕上げられている。色調は、黄褐色を呈する。

2は台付鉢の脚部である。裾部に凹線文を1条を施し、外側から円孔を穿つ。脚部の内面はヘラケズリによって仕上げられている。鉢部底面には円板充填が行われるが、同時に脚部内面からも粘土板が貼り付けられている。胎土は生駒西麓産である。3は、直口する大型の鉢である。端部に面を持ち3条の沈線を有する。外面には凹線文が3条施されるが、口縁部直下には1帯の楯描波状文が凹線文の上から施文される。色調は淡黄褐色を呈する。

4・5は共に甕の底部である。4は外面をヘラミガキ調整で仕上げ、5はナデ調整で仕上げる。内面はいずれもハケ後ナデ調整である。胎土はいずれも生駒西麓産である。

6・7は高杯の脚部である。6は棒状の脚部の裾部であり、外面から円孔を穿つと同時に端部には刻み目を施す。内面は、ハケ後ナデ調整である。7は棒状の脚部であるが、外面はハケ調整

で仕上げられている。6・7共に胎土は生駒西麓産である。

②弥生時代中期末～後期初頭

・第V-2遺構面

[遺構] (図20)

当遺構面は、先に中期後半の遺物包含層とした暗オリーブ灰色粘質微砂(6層)の上面に相当する。上面の緑黒色粘質微砂層(5層)内遺物が中期末・後期初頭に位置づけられることから、当遺構面の時期もこの時期に比定できよう。検出した遺構は溝2条と土坑1基と少数である。これは、埋土と基盤層の土色・土質が酷似しているために、遺構の判別が非常に困難だったことが理由の一つに挙げられる。

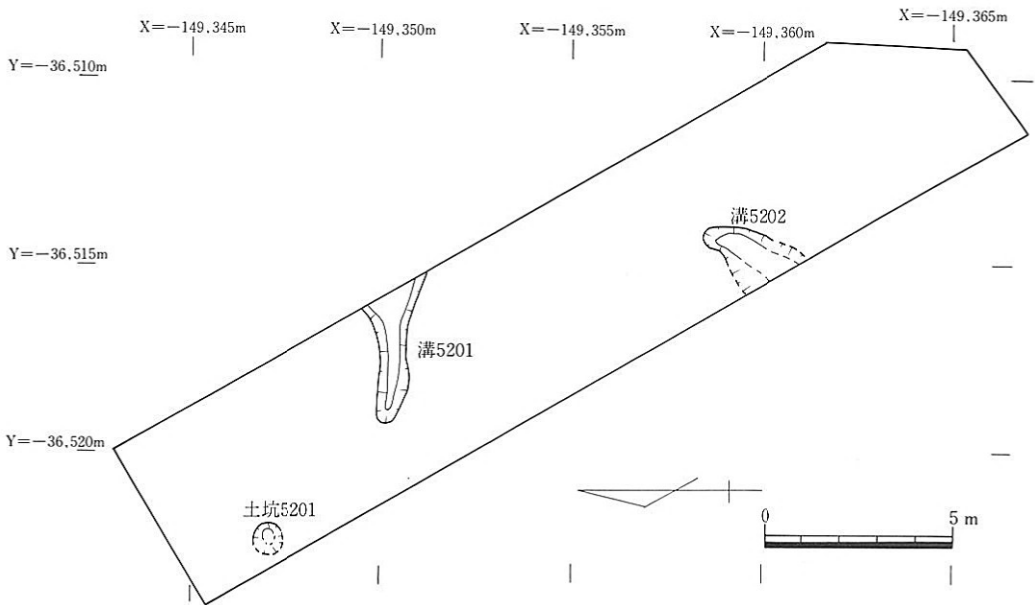


図20 第V-2遺構面遺構配置

溝5201は、調査区の南東部で検出された。一端を検出しただけであるが幅約150cm・約25cm程度の規模であり、北東～南東方向の溝と考えられる。断面形態は半円形を呈する。溝5202は東～西方向の溝である。幅約100cm・深さ約10cmで断面形態は半円形を呈する。両遺構共に底面の高さが一定せず、人為的な遺構とは考えにくい。

土坑5101は、調査区の北西部で検出され、平面形態は円形で直径約70cm、断面形態はU字形で深さ約25cmである。機能としては、土坑というより柱穴と考えることもできる。

[遺物]

当遺構面の遺構内埋土からは、図化できる土器の良好な資料はほとんどない。当該期の遺物としては、この遺構面の上面に堆積する5層に包含される土器だけが図化可能で、且つ報告できる資料である。

5層出土土器(図21)

1～4は甕である。1は口縁部内外面ともに凹線文を2条ずつ描きだし、強いヨコナデ調整によって仕上げられている。体部外面はハケ調整で仕上げられるが、内面はヘラケズリ調整によって仕上げられる。この技法は、2・3のような底部のみの破片でも確認され、5層出土の甕のみにみられるものである。1は色調が淡褐色を呈し、平野部産の胎土と考えられるが、2・3は角閃石を多量に含む生駒西麓産の胎土である。4は小形の甕だが、1のように口縁部にヨコナデ調整を用いることなく端部が不整形なままである。これもヨコナデ調整の発達によって特徴づけら

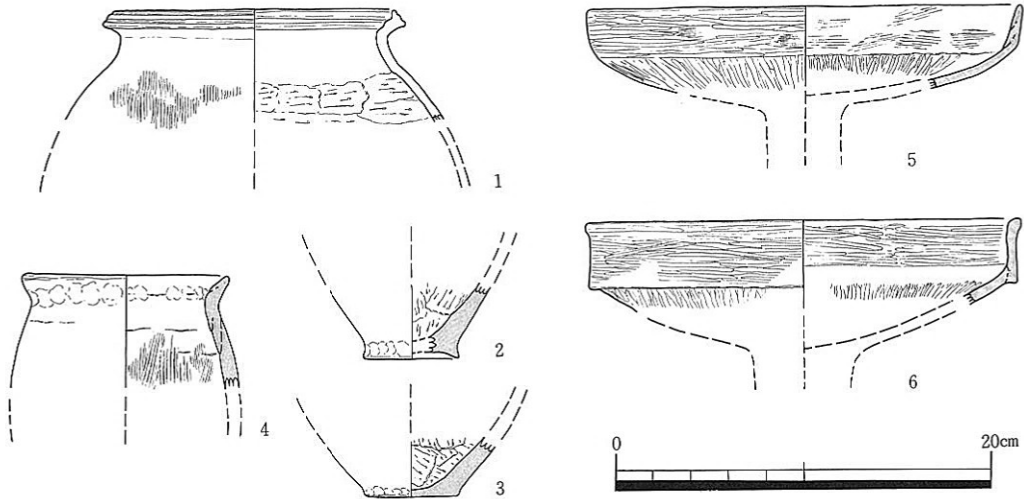


図21 5層出土土器

れる中期後半の土器からは逸脱した様相と言える。胎土は生駒西麓産である。

5・6は高杯の坏部である。5は、緩やかに屈曲しながら口縁が立ち上がる形態をとる。外面は、ハケ調整の後に立ち上がり部は横方向の、それ以下は縦方向のヘラミガキ調整により仕上げられる。内面では立ち上がり部が横方向のハケ調整、それ以下は縦方向のヘラミガキ調整によって仕上げられる。口縁部にはヨコナデ調整は用いられない。胎土は生駒西麓産である。6は坏部の屈曲部位に下方向への張り出しを設け、口縁部は肥厚して外側に面を形成している。内外面ともに立ち上がり部が横方向の、それ以下は縦方向のヘラミガキ調整によって仕上げられる。口縁部には発達したヨコナデ調整は用いられない。胎土は生駒西麓産である。

以上、5層出土の土器には、口縁部におけるヨコナデ調整仕上げからの逸脱傾向や甕における内面ヘラケズリの技法など、中期後半の土器には見られない属性がそれぞれに共有されている。この土器群を編年的に位置づければ、古くは小林行雄氏の西ノ辻N式¹⁾あるいは佐原真氏の第IV様式新相²⁾に比定され、最近では寺沢薫・森井貞雄両氏によって河内第V—0様式³⁾と呼ばれて後期に組み入れて考えられ始めた土器様式に属する。いずれの説をとるにしても、所謂中期から後期への移行期の土器群と考えることができる。つまり、先述のように6層出土土器とは明確な時期差をもった土器群として捉えることのできる資料と言えよう。

5層出土木製品(図22)

5層からは、1点だけ木製品が出土している。小形のヘラ状の木製品である。方柱状に加工した木片の一端を、相対する2面を削り、且つ先端の側縁部を斜めに作りだすことによって、ヘラ状に仕上げている。このヘラ状部分の斜行する側縁部には使用痕跡と考えられる磨耗がみられる。またもう一端は、4面を削ることによって先端が尖るような形状に仕上げられている。このことから刺突具としての性格も想定できるが、正確な用途の認定は出来ない。

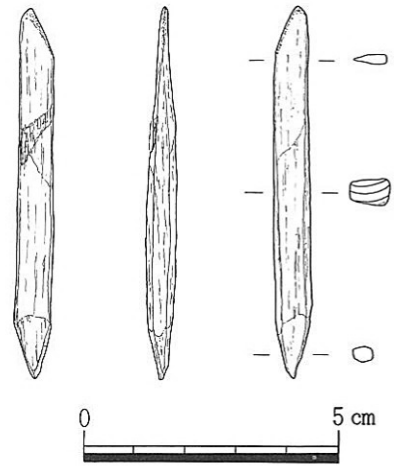


図22 5層出土木製品

参考文献

- 1) 小林行雄 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡N地点の土器」(『弥生式土器集成』資料篇1)東京堂出版 1958年
- 2) 佐原 眞 「畿内地方」(『弥生式土器集成』本編2)東京堂出版 1968年
- 3) 寺沢薫・森井貞雄 「河内地域」(『弥生土器の様式と編年 近畿編1』)木耳社 1989年

3. 古墳時代前期

古墳時代前期遺構面は第4-a層オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層の上面に形成されていた水田面である。上層には第3層にぶい褐色(7.5YR5/4)砂礫(粗砂)層が約40~50cmにわたり堆積しており、水田および畦畔を完全にパックしていたため明瞭な水田面であるといえる。

第3層は『若江北』1983ではA地区北半部のみで検出された赤褐色砂層と対応し、『若江北(その2)』1984で流水堆積層とされたものに対応する。

第4-b層は層厚20cmを有するもので、『若江北』1983では灰褐色粘土層上面-第VII遺構面、若江北その2では暗青灰色の微砂質粘土層=第VII-2遺構面である。若江北その2では第VII-2遺構面の20cm下の粘土層から水田面がもう一面検出され第VII-1遺構面とされている。本調査では第4-a層の20cm下には第4-b層オリーブ黒色(5Y3/2)粘土層(有機物多し)があり土質の関係は一致しているが、第4-b層上面からは遺構を検出することは出来なかった。

また第4-c層オリーブ黒色(5Y3/2)粘土層がありこの上面は青灰色~灰色の細砂あるいは砂質粘土にある第VI-2遺構面と、ベース面は粘土層とする第VI遺構面と関係があることは明らかである。第VI-2遺構面下にある褐色粘土層から切り込む遺構と層も、「その2調査では明確にされなかった。」と述べられるとおり同一の結果が認められた。

水田畦畔は上端の幅18~20cm、下端の幅30~34cm、高さ5cm程度のもので、南東側の畦畔は上端の幅約20~24cm、下端の幅約36cm、高さ5cm程度で、北西側の畦畔1~7よりやや規模が大きい。

区画内上面には5~10cmの小さな凹みが多数検出され、凹みの内部には褐色系(7.5YR4/6)の微砂が入っている。これは瓜生堂遺跡・若江北遺跡などの水田面に検出される足跡痕の埋土と同じ様な現象であり、洪水などによる水田面埋没時の堆積の特徴である。

また、これらの凹みは足跡痕や耕具痕ではなかった。トレンチ中央部には畦畔が検出されず、元来無かったものか削平されたものか不明であるが、この部分は面積が70㎡以上におよぶことから、何らかの区画が存在したと考えざるをえない。

水田区画の面積については、区画4が20㎡以上を有していたものと推定され、区画8が18㎡以上と推定されることから20~30㎡前後が想定される。

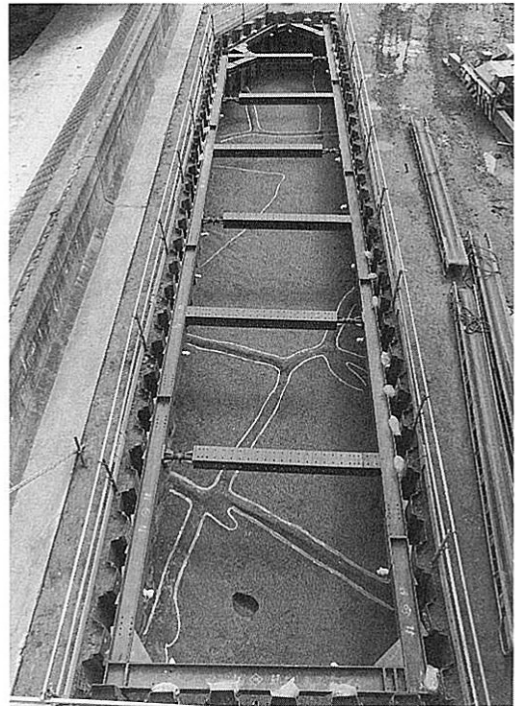


写真12 第4遺構面(古墳時代前期面)

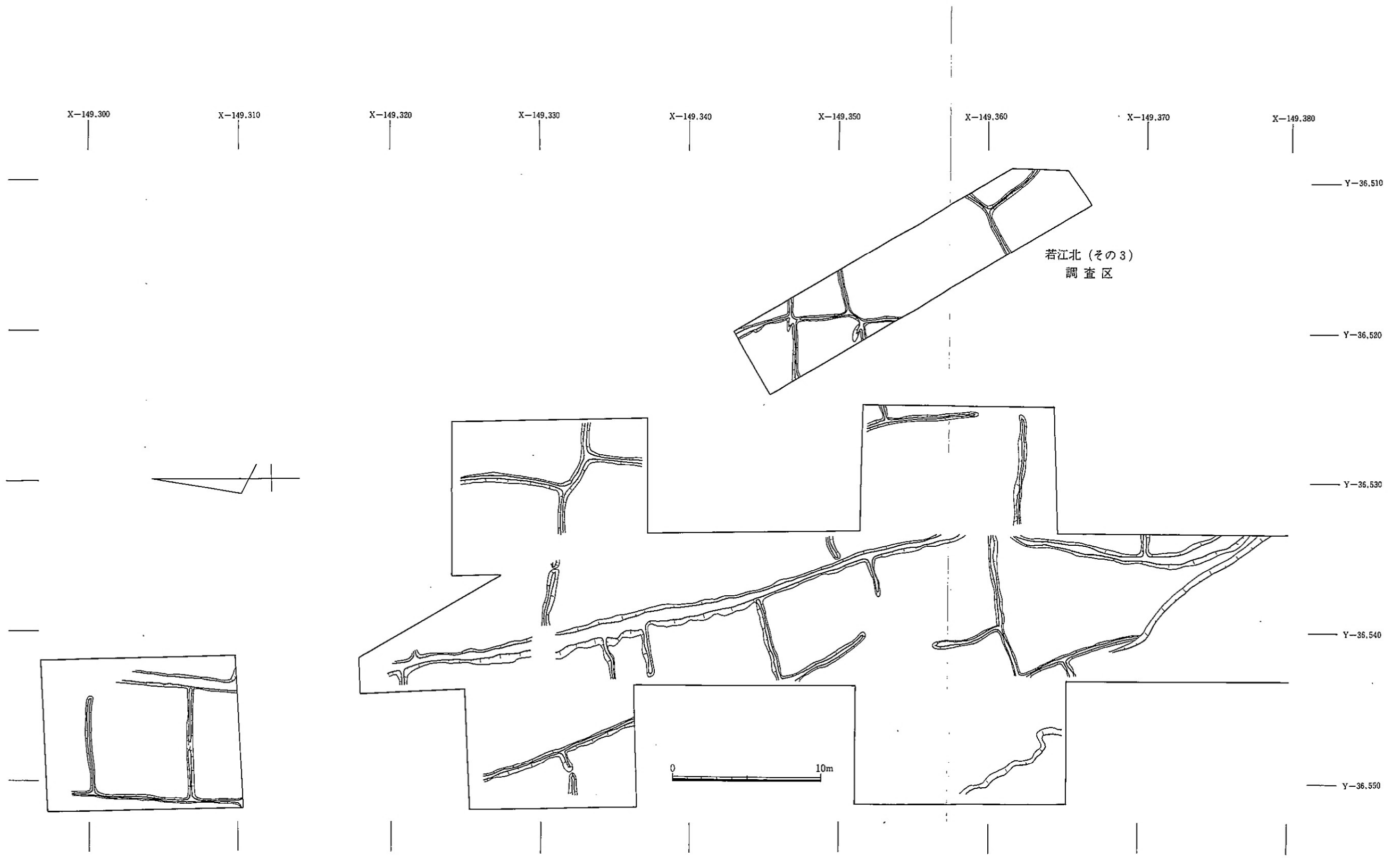


図24 第Ⅶ遺構面 遺構図

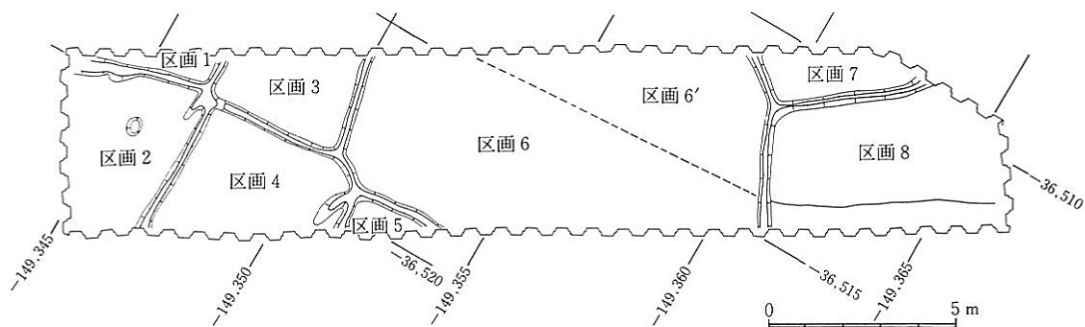


図23 水田区画の略図

	区画1	区画2	区画3	区画4	区画5	区画6	区画6'	区画7	区画8
測点数	3	14	10	12	2	35	20	6	19
平均高(cm)	170.67	170.21	172.30	172.00	177.00	174.83	155.80	145.50	150.26

表3 水田面の高さ

また、断面に関しては、断面観察により畦畔を形成する盛土については認められなかった。水口と思われる幅15cmの切れ目が区画3と区画4に位置する畦畔から検出された。

区画内耕作面の平均的な高さは、区画4がT.P.+1.720m、区画3がT.P.+1.723m、区画2がT.P.+1.702mであることから、東西方向は同一レベルにしており、南北方向は南から北への傾斜を設定している。区画6'・7・8が20cm近く低いのは矢板打設時の地盤の「ずれ」によるものであるため、水田面の高さのデータとしては使えない。

本調査では遺構面から遺物が出土していないが、層序の関係などから本遺構面の時期は従来の成果より古墳時代前期としている。

4. 古墳時代中期以降

古墳時代前期遺構面上層には第3層にぶい褐色(7.5YR5/4)砂礫(粗砂)層が約40~50cmにわたり堆積しており、その上の第2層灰色(5Y4/1)粗砂混じり粘土層と第1層灰色(10Y4/1)粘土層が堆積していた。層厚は第2層が10~20cm、第1層が40cmで、第1層と第2層は類似しており、第2層には粗砂が混じっていることから区別した。

これらの堆積を分層して掘削し、各面の精査を行った。

第3層上面は第3遺構面となり、溝が4条、ピットが5、落ち込みなどが検出された。

第2層上面は第2遺構面となり、落ち込みが検出された。

第1層上面は第1遺構面となり、溝と落ち込みが検出された。

第3遺構面は遺構内から遺物が出土せず時期を決定出来ないが、「若江北(その1)」の調査においては「A地区の中央部で検出した自然流路SD802は、第Ⅶ遺構面以降の遺構としては、最も古く、古墳時代中期のものと考えている。」とされている。また、「Bトレンチで上面の標高O.P.+3.6~3.8m(T.P.+2.1~2.5m)を測る黄褐色粘土層中より、12世紀頃と推定できる瓦器碗を検出している。この粘土層上面には、ピット、土坑等が散在するが、出土遺物には各時期の土器細片が混入しており、時代を特定するにいたらなかった。」とされており、このどちらかに属すると思われるが、埋土などの状況から考えると、古墳時代中期の遡る可能性は希薄であろうとしておきたい。

落ち込み1は幅4m、深さ5cmのごく浅いもので全く人為性はない、落ち込み2・3は水田の段差の痕跡と思われる。溝1・2は幅0.6~0.8m、深さ0.1m程度のもので、これらも水田に伴うものと考えている。

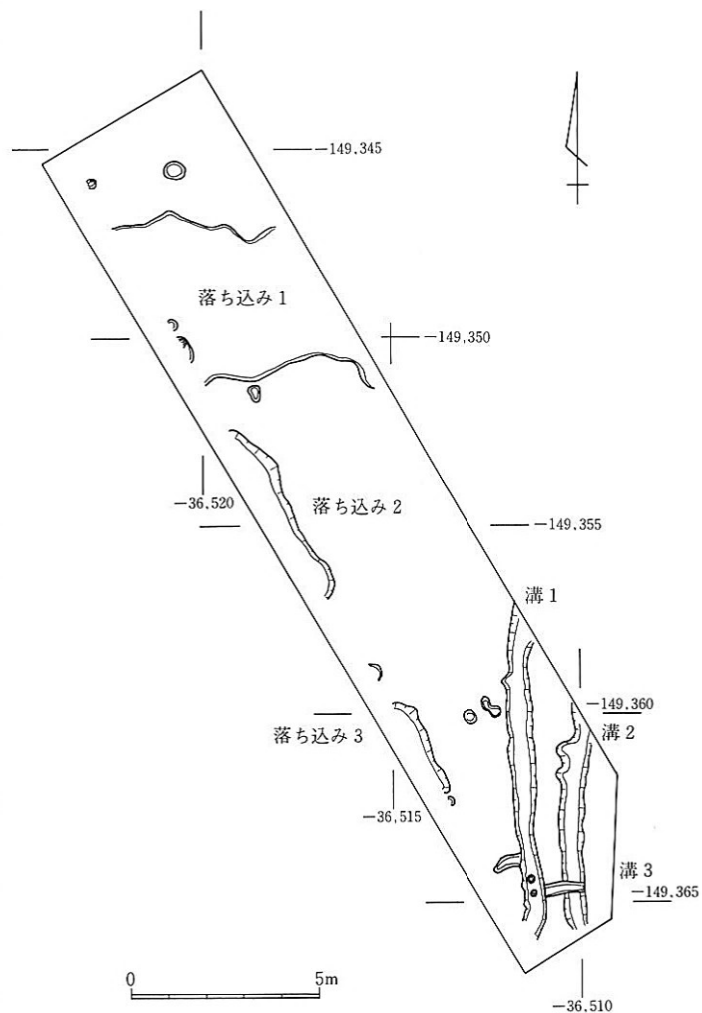


図25 第3遺構面

第1遺構面は面の状況などから水田層と考えられるが、落ち込みの方向は条里には全く一致しない。落ち込み内の出土遺物には各時期の遺物が混在しており、近世以降の遺構である。

第2遺構面は面として検出したが、落ち込み埋土は第1遺構面の落ち込みの残りであったことから、現時点で遺構面として調査したことを撤回しておきたい。

また、現地表面までは第二寝屋川の護岸工事や近畿自動車建設などによる攪乱をうけており、高い部分の一部に旧耕作土が残存していた。現地表面の標高はT.P.+4.0m程度であった。

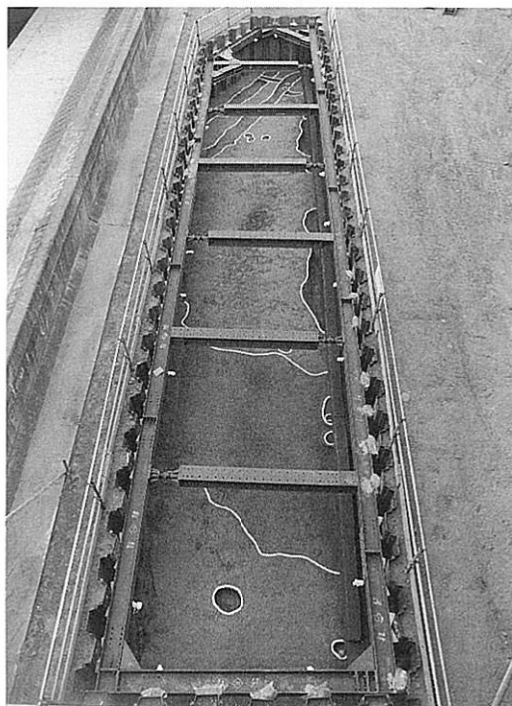


写真13 第3遺構面（古墳時代中期以降面）

若江北遺跡その3 1992			若江北遺跡その1 1983			若江北遺跡その2 1984		
層名	遺構面	層厚cm	層名	遺構面	層厚cm	層名	遺構面	層厚cm
第1層灰色(10Y4/1)粘土層		30~50	黄褐色・黄灰色・褐灰色の粘土層	第VI上 近世		最上層 土坑・溝	江戸時代	
第2層灰色(5Y4/1)粗砂混り粘土層		10~15	黄褐色粘土層 (B地区)	第VI上 中世				
第3層にぶい褐色(7.5YR5/4)砂礫層		50	赤褐色砂 (A地区北半部)	第VI上 古墳		流水堆積層	第VII上	30
第4-a層㇀-㇁黒色(5Y3/1)シルト層	第4	20	灰褐色粘土層上面	第VII		暗青灰色の微砂質粘土層	第VII-2	20
第4-b層㇀-㇁黒色(5Y3/2)粘土層		5~10	暗黄褐色粘土とごく薄い炭化物層			粘土層	第VII-1	
第4-c層㇀-㇁黒色(5Y3/2)粘土層	第5	5~10	青灰色~灰色の細砂あるいは砂質粘土	第VI-2	5~20	ベース面は粘土層	第VI	
			褐灰色粘土層	第VI-1	10~30	その2調査では明確にされなかった		

表4 遺構面と層序の対応関係

V. 結語 —巨摩遺跡・若江北遺跡の対応関係—

以上、これまでに巨摩・若江北(その3)の調査概略を述べてきた。前章までは、巨摩・若江北両遺跡の調査成果は別個に説明してきたが、本章では、両遺跡の調査成果を取りまとめて述べたい。

1. 弥生時代前期～中期前半

弥生前期に関しては若江北(その2)で河道やそれに付随する自然堤防が検出されていたが、今回の調査では巨摩遺跡・若江北遺跡共に遺構を検出することは出来なかった。中期前半については今回調査の巨摩遺跡の第8遺構面と若江北遺跡の第II遺構面が対応するが、この面では両遺跡ともに自然流路や地形の凹凸が確認されたのみであった。また、今回調査の巨摩遺跡の第7遺構面と若江北遺跡の第III'遺構面は対応するが、ここでは両遺跡ともに畦畔が検出されている。当該期には今回の調査区域周辺が水田として利用されていたことが判明した。

2. 弥生時代中期後半～後期初頭

巨摩遺跡の第6'遺構面と若江北遺跡のV-1遺構面は弥生中期の遺構面である。若江北遺跡では、この面で柱穴・土坑・溝などが検出されて集落が存在したことが明らかになっている。しかし、巨摩遺跡では遺物も遺構も検出されていない。この事実から当該期の集落の範囲の一端が類推できる状況になった。また、若江北遺跡では土器包含層が細別可能であることが確認され、そのうち下層は中期後半に上層は後期初頭に対応する土器が出土している。今後この分層の妥当性が、より大きな範囲での調査で再確認できれば、中期～後期の土器編年上の良好な資料が得られることになろう。

3. 古墳時代前期

巨摩遺跡の第2・3・4遺構面と若江北遺跡の第VII遺構面は古墳前期の遺構面である。その巨摩遺跡第2遺構面と若江北第VII遺構面が対応関係にあると考えられるが、いずれにおいても水田畦畔が検出されている。巨摩遺跡第3・4遺構面でも水田畦畔や足跡痕が検出され水田として機能していたと判断できる。当該期を通じてこの地域が集落ではなく農耕地として利用されていたと推定できる。

4. 歴史時代

上記以降の時期では、両遺跡の遺構面の対応関係を把握することは困難である。巨摩遺跡では中世に土坑や井戸2基が検出され、集落が存在したと考えられる。若江北遺跡でも、柱穴や溝状遺構が検出されており、中～近世の一時期には集落の営まれていた時期があったと考えられる。

以上が今回の巨摩、若江北両遺跡の調査成果の対応関係である。極めて限定された範囲での発掘調査ではあったが、過去の両遺跡の調査成果を補完する知見を得ることはできたと思う。特に弥生中期後半集落の領域が確認できたことは重要である。本書が中河内地域の歴史環境を明らかにするための一助とならんことを願いとめたい。

財 団 法 人	
大阪府埋蔵文化財協会蔵書	
第 09466 号	
()	

巨摩・若江北(その3)
発掘調査概要

—都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設に伴う
巨摩・若江北遺跡埋蔵文化財発掘調査概要報告書

発 行 財団法人大阪文化財センター

1993年 3月31日

